
世界がオウルちょっとマエ

アタマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界がオウルちよつとマエ

【Nコード】

N5945S

【作者名】

アタマ

【あらすじ】

平和で退屈な日々を過ごしていた主人公：羽宮翔悟。ある日唐突に世界は終焉を宣言される。

別に何が出来るわけじゃない。けど、できれば、悔いは残したくない。

未来の见えない不安と闘う普通の高校生の少し普通ではない葛藤のお話。

この作品に登場する団体、企業、個人名は全てフィクションであり現実の同名のものは一切関係ありません。

Prologue 1：オワリのハジマリの始まり（前書き）

小説の形をとる初めての作品で、正直ちゃんと形をとれるのか心配です。連載とはいってもあまり長く書く予定ではありません。むしろ短い予定です。

遅筆なので気に入って貰えたなら、最後まで付き合ってください。

平23・4月現在

Prologue 1：オワリのハジマリの始まり

その日観た光景は鮮烈に、そして、深い衝撃を与えて、多くの人々に記憶された。

”この世界を終わらせるコトにしました。皆さん、最^ゴの刻>トきくまで好きなコトをして才過^{すこ}しください。”

突然ありとあらゆるメディアを通じて、その謎のメッセージは送られてきた。

ビルに備^{そな}え付けられた巨大なスクリーンに、会社の食堂や病院などの公共施設にある簡素なブラウン管テレビに、これ見よがしに電化製品売り場に並ぶ最新薄型液晶モニターに、果ては通話中の据置き型電話の受話器から、携帯電話のスピーカー、ラジオから流れる軽快なリズムを断ち切り、通話中の相手の話を打ち切り、子供が楽しみに観ている夕方のアニメを蹴散らし、ニュースを伝えるアナウンサーを排除し、およそ日常を取り巻く全ての電波を妨害し、”それ”は人々を啞然とさせた。

電話やラジオを聞いていた人間は驚いた。しかしモニターを見ていた人間は驚きよりも恐怖した。

なぜなら番組を中断して流れた声と共に表れた画面は、白と黒の砂嵐のような背景を背負い、酷くカラフルで、歪^{いびつ}な文字を浮き出していたのだから。

その日、多くの人々にその言葉が刻み込まれたのだった――

ふあつ。と欠伸をひとつ。

ここはごく平凡な市立の高校。市立皇高等学校だ。

自慢なのは学校名に恐れ多くも「皇」の字が入っている事ぐらいの全く平凡な学校だ。

授業中なので欠伸しているのを教諭に気取られないように直ぐに噛み堪える。

今は五時限目の半ばである。昼食を食べ終え適度な休息をとり、天気も陽気な五月晴れときている。これで眠くならないのは生物としてオカシイのではないかと、と、羽宮 翔悟は思う。

黒板に書かれた意味不明な計算式を適当にノートへ書き写しながら、ぼんやりと窓の外を窺う。

校庭では食後にも拘わらず大きな楕円形のトラックを体操服の生徒が走らされており、それを如何にも熱血といった季節には少々早いと思われるタンクトップ姿の体育教師が監視している。

（熱血というか脳筋か？）

心の中で訂正する。ふと視線を上げれば青い空と漂う雲が目映る。今日も平和だな、などと取り留めもない事を考えながら、新たに追加された黒板の計算式をノートに書き写す。

学生の本分は勉強だ。一応そこところは弁えている。最低限の対応はする。飽くまでも「最低限」であり、その本分たる勉学を十分に遂行しているかは置いておく……

”謎のメッセージ”が人々を驚かせたのは今からおよそ四ヶ月前になる。

2月15日午後5時47分。そのメッセージは人々に認識された。

それからの一週間はただただ混乱の極^{きわ}みだった。混乱に乘じ新興宗教のようなものがいくつも発足し、それらによる暴力事件などが頻発した。全国各地では何を考えたのか、少なくとも行方不明者も続出した。

だが、社会全体を観てみると然^{さほど}程の機能障害は起こらなかった。

一つには世論の眼はこのメッセージに懐疑的だったのだ。

実を言うとメッセージを直接見たという人は多くないらしい。

帰宅途中の学生、会社勤めの社会人、夕方^{バーゲン}の戦争から帰還する主婦、友人と一日の終わりを惜しむ子供たち。

様々な人が様々な理由で移動している時間帯だったのに加え、聞き取れない訳ではないが決して親切ではない速さで読みあげられ、文を読み終わるとまるで何事も無かったように元の画面に、元の通話状態に戻ったのだ。時間になると、およそ4秒でしかなかったらしい。

その中でメッセージを

捉え、把握したのは、聞いた人々の中でも極一部だったろう。多くもない視聴者全体を觀ても、その内のほんの一割程だと予想されている。

ではなぜ社会現象のような規模にまで膨れ上がったのか。

その原因と云われるのは、近代目まぐるしい発展を遂げているネット環境の仕業だとも、モラルを欠いた報道局が原因だとも云われている。だが、今の世風から予測するとやはりネット内の書き込みが大きな要因だろうと、翔悟は予想する。

最初がどこの誰だったかなど誰も分からない。だがそれは自然発生的に広まった。

翔悟が最初に知ったのは某有名SNSサイトだ。その日、「フレ」と呼ばれる一種の知り合いの様な者の書き込みを見た。特にメッセージ性の無い簡単な書き込みで「謎のメッセージ受信！？大規模テロのY O K A N ！！」という意味不明な文を読み、なにやってんだ。と、苦笑し、その日は何もせずに床に着いた。

翌日。残り少ない授業日数に気だるさを感じつつ登校すると、翔悟の教室である2年B組は賑わっていた。

適当に挨拶しながら自分の席に着き荷物の整理をしていると、教室の後ろで盛り上がる輪から男女二人組が外れて翔悟に近寄ってきた。

「っはよーっす！」

「おはよー。」

軽く手を上げながら挨拶する男子は高校1年からの友人で、名前は桑原 平志^{くわはら へいし}。全体的に線が細いうえに背も高くなく、おまけに眼鏡まで掛けているので一見すると理系だが、本人いわく体育会系らしい。その言は偽りではなく、彼が在籍するバスケット部ではわりかしの多い部員の中で二軍に入るくらいには動けるらしい。「らしい」ばかりなのは翔悟はバスケット部では無いし、別に見た目を指摘して訂正を受けた。などという事が二人の間では起きなかっただけである。体育会系だとクラスのお調子者に反論していたのを一度聞いたきりだ。

一緒に挨拶してきた女子は栗崎 柴奈^{くりざき しの}だ。別に恋愛関係では無いのだが、幼稚園の頃から今に至るまでの長い付き合いだ。決して可愛くない訳ではない。

むしろ天然色のブロードが鮮やかなロングヘアは綺麗だと思うし、顔も端正で、性格も面倒見が良い。まず嫌われるような人間ではない。と思う。

それに、最近は体の各所に肉が付いてきてとても魅力的だ…と、周りの男子達は評価していた。

いわゆる幼馴染にあたる翔悟と柴奈^{しの}だが、恋仲にまで発展するよう事は今まで無かった。

「おはよう。」

目も合わせず二人に挨拶を返す。

「相変わらずお前は無礼だな。」

「どうも。」

「平志くんごめんね。気にしないで。」

「いいっていいって。柴奈乃ちゃんこそ、こんな陰気野郎を庇つても特な事はないぜ」

散々な物言いだ、平志にはそれ自体を気にしている様子は感じられなかった。流石に一年も相手をしていると、こんな人間なんだと諦めもつくのだろう。

「ねえ、翔くん。噂は聞いた？」

「噂？」

教科書を全て机に入れ終え、二人の方へ向き直る。

噂と聞かれても色々ある。だが、柴奈乃が聞いてくるような程の新しいものは聞いた覚えは無い。

「うん。その名も「謎のメッセージ」っ」

人指し指を立て、眉間にしわを寄せて声を作る。本人は怖がらせようと一所懸命なようだが、どうにもお茶目な印象を受けてしまい、今一迫力に欠けた。

「……。」

「あれ？」

「ダメダメ」。柴奈乃ちゃんじゃ全然怖くないよお。」

吹き出しながら忠告する平志に頬を軽く膨らせて怒る柴奈乃。いつものパターンである。

「で、噂って、どんな？」

「そうそう。噂だよ。う・わ・さ。」

柴奈乃はまた声を作って言う。だからそれは効果薄いって。という忠告は面倒なのでやめた。

「なんと昨日の6時くらいに「この世界は終る」っていうメッセージが全国で流れたんだって！」

両手をぎゅっと握ってワクワクと云った具合で熱弁する柴奈乃。オモチャを見つけた仔犬を連想させられる。

ふと昨日のSNSの書き込みを思い出す。が、まあ噂だしそんな物かと軽く流す。

「へえ〜。」

「ふっふっふ… そのメッセージなんだがな… なんと俺は直に聞いたのだーっ！」

「な、なんだってー！」

平志が待つてましたとばかりによく分からないポーズをズビシッと決め「俺見ちゃいましたアピール」をし出す。それに律儀にリアクションする柴奈乃。

この二人はいつリハーサルしているのか。つくづく気になる息の

合いつぷりだと呆れる。

「で、どんなメッセー…

ガシャーンッ

下の二階からガラス窓が砕け散るような音が響く。

ジリリリリリリリリリリリリリリリッ

一泊置いて突然学校の防災警報が頭上で鳴り響いた。

Prologue 2：オワリのハジマリの始まりの終り

四ヶ月前の事をぼーっと思い出しながら翔悟は二人を見ていた。春の陽気は過ぎ去り、夏の暑さがジワジワと迫ってくる6月中旬。

「そしたらタロキチが、ありえねえーっていつからさっ。今は現実だ。ってカツコよく決めたんだ。」

平志が大きく広げた腕を一度畳んで素早く片手だけを空に突き付ける。

「タローくんも平志くんもおかしいよ。」

平志のダイナミックジェスチャー付き事後報告を聞いて苦しそうに笑う柴奈乃。それに気を良くして更にアクティブになる平志。まったくこの二人は……

四ヶ月前と何の違いも無い二人を確認し、どこか安心して自分の氣付く。

ふと溜息を吐くと何を勘違いしたのか、平志は思い切り落ち込む小さくなったという形容が相応しい姿に励ましの言葉を掛ける柴奈乃。いや、柴奈乃さん、こいつにそんな必死なフォローは必要ありませんよ。

2月16日、早朝の市立皇高校。

防災警報が鳴り響く中を翔悟達2年B組や他の教室の生徒がマニュアル通り体育館に向かった。混乱も無くスムーズに移動できたのには驚いた。人間、パニックになると逆に静かになるらしい。

一時間もすると事態は收拾されたようで、その場で臨時の生徒集会が開かれる。

校長の注意を兼ねたありがたい(?)武勇伝を聞かされた後、生活指導教員からいくつかの注意事項を聞いて集会は終了した。

教室に戻ると担任が教壇に上がり、先ほどの防災警報の理由を短めに説明しだした。簡単に言つと暴漢が学校に侵入し、暴れたそう
だ。

「えー、最近は物騒になつて来ている。今後、いつ、どこで、身に危険が迫るか分からん。みんな、十分注意するようになーつ。」

「……はーいつ。」「」

その日はそれで終わったが、なんとなく、本当になんとかなく、例えるなら初めて聞くアーティストが気になった程度の些細な動機で「謎のメッセージ」とやらを調べてみようかな、と翔悟は思った。

その時はそれだけで、結局調べる事は無かつたのだが、後に翔悟の予想を上回る規模で噂は形の無い猛威を奮うことになる。この時の彼は、いや、ほとんど全ての人間がこの時それほどの危険視はしていなかつた。

あれからおよそ四ヶ月が経った。ここは市立皇高校の屋上。夕暮れに沈む町並みを柴奈乃と二人でぼんやりと眺めている。

皇高校は市立学校には珍しく開校中は屋上が開放されている。過去にはあまり好く^よない事件もあるみたいだが、それらにもめげず屋上の開放は続けられていた。開放的な空間が日々の就労に疲れた生徒や教員に人気のスポットだ。

放課後だからなのか、今は他に生徒の姿は見えない。

なぜこんな場所に居るのかというと、他ならぬ隣に座る柴奈乃の誘いである。呼び出されて二人で景色を眺めはじめてから、かれこれ二時間になる。

呼ばれて屋上に着いた時の彼女は、とても心配そうな、不安そうな表情をしていた。こういう時の彼女はなかなか切りだしてくれない事を知っている。仕方がないので柴奈乃が喋るまで待つ事にして、適当なベンチに座りながら彼女にも席を勧めて、今に至る。

そろそろ屋上の開放時間も終わろうかという頃だ。

「……ねえ、翔ちゃん。」

「んあ？」

夕空を眺めながら今日の晩飯の事を考え始めると、ようやく彼女は重たい口を開いた

「翔ちゃんはどう思う？ その……あの、うわさ…の、事。」

半ば消え入りそうな声量で聞いてくる幼馴染での眼を一度見て、

また視線を空に戻す。

「うん……」

正直なところを話すならば「どうでもいい。」の一言に尽きるのだが、隣で質問をしている幼馴染がなんだか、ひどく不安そうにしている。…気がする。

そういった他人の不安に対して「どうして？」と聞くほど翔悟も無粋ではないつもりだ。見知った女の子が不安に震える姿を突き放すほど残酷ではない。

「そうだなあ……」

視線を柴奈乃に合わせて言う。

「何かあったら俺がお前を護ってやるよ。」

小さい頃からそうしてきたように。

「……え。」

翔悟の言葉を聞いた瞬間に少女の瞳が驚いたように真ん丸になる。時間が経つごとに頬が紅潮していき、口をぱくぱくさせている。なにかやらかしたか？ と少し焦って付け加える。

「ほら、お前小さい時からずっと俺の背中に隠れてたじゃんか。だからお前が立派に一人立ちできるまで相談とかにはちゃんと乗ってやるし、お前を苛めるような奴からも護ってやるぜ。って事だよつ。」

慌てて付け加えたので少々めちゃくちゃな感が拭えない付けだしになってしまった。むしろこちらが失敗だったかと少し悔やむ。

「むー！ 私だっていつまでも翔ちゃんの背中に隠れてなんかいないもんっ！ この前だってCD一人で買えたもんっ！」

柴奈乃は突然怒ったようにぷりぷりと反撃してきた。しかし、その時を思い出して翔悟は異議を申し立てる。

「その時はお前の我儘で俺が入り口で待ってて、お前がレジにいくまでの間、^{あいだ}2時間は待たされたんだが……」

「っ！！ でも、一人で買えたもんっ」

その一点張りかつ。と心の中でツツコム。こうなるとこの幼馴染は強情なのを翔悟は知っている。

「あゝ、はいはい、凄い凄い。」

「あー！ 今「コイツメンドクセー」って思ったでしょー」

ひどく悲しそうに言うものだから泣きだすのではないかと少し心配になる。

「違うつて、ちゃんと一人で買えたのだったのは事実だからな。その点は評価してやる。」

「むむむ………むっ！………ふふん♪ 当然だよ 私だ

ってやればできる子だもん♪」

少しの間、悔しそうに唸っていたと思ったら突然開き直ったように自分を讃えはじめた。

「あつ、実はこの前カワイイ服見つけたんだ」 翔ちゃん、またお買い物付き合ってよ」

どういった思考回路を廻ったのかは解らないが、どうやら機嫌は直ったようだ。

この幼馴染みが嬉しそうにしているのならそれで良いと、最初の質問はこのまま保留にしておく事にした。

「約束！ 絶対だからねっ！」

またか。と呆れるが、そんな彼女の要求も嫌いではないので、また今度な」と約束する。

「うん！ 約束だぞ」

「はいはい。そろそろ帰るぞ。」

学校の事務員が昇降口から出てくる姿が遠目に見える。もう屋上の開放時間は終了らしい。

「……………うん！」

振り向くと、彼女は夕日に暮れる町並みを静かに見渡してから元気よく返事をする。

世界が終わると言われてから四ヶ月が経つ。あれから世界は変わっていないと翔悟は思う。

学生である翔悟は毎週5日の登校を続けているし、友人達は皆健在だ。テロだの紛争だのは翔悟が生まれる前から続いていたし、謎のメッセージ以降には殺人・暴力・盗難事件が増加傾向にあるとメディアや専門家が口を酸っぱくしているが翔悟自身としては実感が感じられない。

何よりも変わらないと思えるのは、今も幼なじみが楽しそうに笑っている事だ。

翔悟にとっては、目の前を歩く幼なじみが笑顔でいられるなら世界がどうなろうと、どうでもいい話なのだ。

でも…… と思う。

二度とこいつに会えなくなるのはイヤだなあ…… と。

「ほーらー、翔ちゃん、置いてーくよー」

「はいはい。」

何も変わらない。今までも、そしてこれからも。

事務員のおじさんが苦笑しながら早くしてくれと冷やかすので、少し駆け足になる。それに律儀に謝る柴奈乃を見て翔悟も苦笑いを浮かべるのだった。

オワリの始まり：Count？

カッチッ…カッチッ…カッチッ…

室内を秒針の音が満たす。耳を澄ませば筆記用具で紙に何かを書き込む音が間断無く聞こえる。

あまりの沈黙に耐え兼ね、時節じせつ誰かの吐息が洩れる。

解答用紙に一頻り書き込んだ翔悟は、監視役の教員に注意されないよう小さく伸びをする。

七月の午前。夏休みを目前にした皇高校すめいこうは、只今絶賛テスト期間だ。

期末試験と呼称されるこのテストは、その名の通り学期末に行うまとめのような試験だ。皇高校は市立なので、一年を大きく三つに分けた全三学期で構成されており、各学期末ごとに期末試験が用意されている。

そんなわけで今、翔悟の居るこの2年B組を始めとする1年生、3年生を含めた全学年がこの息苦しさの中、己の知識と記憶を総動員し憎き解答用紙と格闘しているのだ。

周りを見渡す。翔悟の席は六人五列の窓側で一番後ろなので、教壇からは割と死角だ。どこのクラスにも一人は居るとか云われる山本や山崎、渡辺といった名字はこのクラスには居なかった。これは案外凄い事では…と一人心のなかで感動する。

誰もかれも下を向いて、懸命に書き込んでいるのがよく見える。テストの結果如何では夏休みを返上し、学校に召喚されてしまうのでそれも当然かと納得する。

と、三人を挟んだ廊下側の男子と目が合う。本人曰く親友（知らない間に友人から格上げしていた）の桑原 平志だ。

彼は目の下に隈を作った顔でニヤリと笑う。自称アクティブ系眼鏡の彼の最終奥義・一夜漬けのせいだろう。

試験最終日ともなるともはや正常な人間には見えない様相を呈している。恐ろしい気合いだ。

それならば最初普通に勉強していればよいのに。というのは言わないお約束だろう。

直ぐに用紙に向き直った彼の横顔は鬼気迫る様子だ。どうやら付け焼刃の切れ味は、あまりよくないようだ。

翔悟もそんな彼の努力を見習い解答题用紙に再戦を挑む。

間違っても赤点を獲るのは翔悟も嫌なのだ。もっとも、赤点大好き！なんていう頭のオカシイ奴が居るのなら、是非合ってみたい。と考えながら、記憶を頼りに空白を埋める作業に取り掛かるのだ。た。

終了のチャイムが鳴る。まるでパンパンになった風船から空気が抜けるかのように、教室に張りつめた緊張が解ける。

一科目の制限時間が45分と長くはない。だが、その間中集中し続けるのは、やはり精神的にくるものがある。

それを10分の休憩を挿むとはいえ連続で三科目もやったのだ。特に勉強が得意という人種は別だが、大多数の一般生徒には疲れな

い方が難しいと言える。

翔悟も頭をフル回転させた反動のせいか、少し眠くなってしまう校庭をぼんやりと眺めていた。

次々と教室を出て行くクラスメートを見送りながら、赤点は無い事を根拠もなく確信し、来る夏休みに思いを馳せる。

すると、教室の入り口に見慣れないものを発見した。
いや正確には、本来ここに居るはずのない人間がいた。

耳に掛からないよう整えられたショートヘアに、少し長めの前髪は黄色い右寄りにヘアピンで留めている。背は教室を出て行く2年B組の生徒より頭一つ分は低い。

一番違和感を感じさせるのは胸の前を飾るリボンの色だ。翔悟の学年は翠色のネクタイやリボンなのだが、彼女の着けるそれは青色だった。記憶によれば下の学年だったはず……

そんな彼女がなんとも…… 小動物のような愛らしさで誰かを待っているようだった。

「どーしたの？」

ぼーっと小動物観察していると突然横から声を掛けられた。振りかえると、声からして既に優しいような雰囲気醸し出す女の子。

栗崎 柴奈乃くしななき しなのがそこに居た。

彼女は不思議そうに聞きながら、翔悟のさっきまで見ていたと思しき教室の入り口を見やる。

そこにはやはり小動物のような後輩が扉の影でもじもじしていた。

柴奈乃が振り返って嬉しそうに言う。

「もしかしてえ、あの娘見てたの？ 可愛いねえ。私ちよつと話してくるう」

そう言うつと柴奈乃は顔をふにやふにやしながら入り口の後輩に近づいていった。

余談だが彼女は可愛いものが大好きだ。その実力は、ペットシヨップの仔犬や子猫を相手に一日を潰せる程だ。

翔悟は一度彼女にペットシヨップへ付き合わされた事がある。延々と柵の中の仔犬とじゃれる柴奈乃を店員が、業務上はお帰り願いたいが人として邪険にできない彼女への応対に困り、そんな店員に気を遣い翔悟が30分毎に謝る。という、とても苦しい体験をする事になった。

そんな彼女の犠牲になる名も知らぬ後輩の健闘を祈りつつ、自分も帰り仕度を始める。

未だ燃え尽きて席に突っ伏しているいる平志でも誘ってゲームセンターにでも寄ろうかと思っていると、柴奈乃が先ほどの後輩を連れて自分の所へ来るではないか。

なんとなくだが、あまり良い予感がしない。

「翔ちゃん。こちら1年の一井 珠胡ちゃん。翔ちゃんに用があるんだって。」

「翔ちゃっ！？……えと…あの……い、一井…珠胡です。その…

あの……」

「がんばってっ！ タマちゃんならできるよ！」

何かに驚いた後もしもと俯いてしまった彼女を柴奈乃が応援する。そもそも一井さんなる彼女が一体何をしようとしているのか、この天然気味の幼馴染は分かって応援しているのだろうか。

目の前で俯く後輩の目的が分からないという点では同じだが、彼女は自分に用があるようなのだ。やはり自分は黙って待つべき処だろう。

「先輩、その呼び方やめてくださいっ」

ただでさえ困っているのに、残酷な先輩の追撃で完全に自分のペースを失い、ワタワタし出す一井さん。

柴奈乃さん。あんたは鬼だ。潜在的な鬼だ。今確信した。

「あの……あの………こ、これ！あのっ、受け取ってくださいっ！……えと……で、ではこれでっ……さよなら！」

そう言う彼女は、封筒のような物を殴るように押し付け、走っていった。

押しつけられたそれを見ると、白い地に紅い文字で「羽宮先輩へ？」と書かれていた。

「おゝ 凄いな。いわゆるラブレターってやつじゃない？」

嬉しそうに茶化す柴奈乃に溜息ひとつ。

ラブレターは予想の内ではワースト1なのだが、まさかストライクしてくると思わなかった。

残念だが翔悟にその気は無いのでお断りする予定だ。気は進まないが明日にでも断ろうと、手紙を鞆へと仕舞い込む。

「ほら、行くぞ。」

「ええ、読もうよ、読ませてよ、読ませて下さい。」

まったく、この幼馴染は……

「人の恋路を冷やかすのは良い趣味じゃないですよ。」

「翔ちゃんのケチー」

翔悟は肩を竦ませ、小バエのように鬱陶しい柴奈乃を往なしながら、燃え尽きている平志へと歩いてゆく。

日も暮れなずむ夕暮れ時。影が長く伸び、その身長差は本体である身体の二倍は開いている。

燃え尽きた平志をノセ、柴奈乃も連れて三人でゲームセンターへ行った帰りだ。

高校に徒歩で通える翔悟と柴奈乃とは違い、平志は電車通いだ。彼とは駅前で別れた。

「うふふ、流石は翔ちゃんだね。」

「はいはい。感謝してるなら今度何か奢ってくれ。」

「うんうん、まかせてー 今度オススメのパフェを紹介するよ」

「それは楽しみだ。 って紹介だけかよ。」

隣を歩く柴奈乃は手元のマスコット人形を抱いてご満悦だ。

ゲームセンターに入ると柴奈乃は途端、クレーンゲームを見て動きを止めた。

彼女の視線を追ってみると、アクリル板が張られたボックスの中には拳大のワニ「いぶしだい」ともトカゲとも附かないマスコットが山を築いていた。

欲しいのかと尋ねると、マスコットから視線を離さずにコクコクと何度も頷く柴奈乃。

残念ながら柴奈乃はクレーンゲームが下手だ。クレーンに止まらず、およそゲームと名のつく事は丸つきりダメらしい。

本人もそれは自覚しているようで、物欲しそうにはしているが、決して手を出そうとはしない。

仕方ないので獲ってみせると、彼女は目を輝かせて受け取る。

何度か失敗し、少くない金額が散ったが、この笑顔を拝めたのなら掛けた金額の甲斐もあるというものだ。

そんなこんなで今、隣を歩くお嬢様は上機嫌だ。

「…でねえー ヨーグルトとアイスの組み合わせが堪らないんだあ」

さつきから聞いてもいないのにパフェの魅力を熱弁している。翔悟は適当に相槌を打っているだけなのだが、彼女のパフェ紹介コー

ナーは終りを見せない

「…やっぱりイチゴソースと桃の組み合わせはお約束だよねえ…
あっ」

そうこうしているうちに前方にY字路が迫って来た。

このY字路は右に行くとは柴奈乃の家。左に行くとは翔悟の家だ。
すなわち二人の帰路はここで別れることを意味する。毎朝ここで
合流し、毎日ここで別れる。

中学校からこの行程は繰り返され、いつしか当たり前のようにな
っていた。

「じゃあ…またね。翔ちゃん。」

「おう？ また明日な。」

今日もここで別れる。別にその事に寂しさを抱く年頃はとうに過
ぎたし、今更そんな事を考える事も無くなっていた。

しかし今日は違った。今日だけはここで初めて別れた時とも違う
違和感があった。

その違和感はある些細で、何が違うのか聞かれたとしても答える事は
出来ないのだが、翔悟は不安でしょうがなかった。

家に帰ったら靴を脱ぐ。部屋に戻って制服を着替えハンガーに掛
ける。

いつもと変わらない帰宅だ。

翔悟の家族は、父が会社勤めのサラリーマン。母は専業主婦。4
つ年上の姉がいるのだが、彼女は就職直後に北海道に転勤してしま
い、今は北海道で一人暮らしをしている。いわゆる一般家庭の見本
みたいなものである。

母は今の時間は晩飯の材料と息抜きを兼ねて外出中なのだろう。
と、納得。

別段これといって変わった事はない。だが翔悟は何かもやもやと
した物が心につつかえている感覚がして、どうにも釈然としなかつ
た。

違和感の正体を今日一日を降り返って探っていると、ふと学校で
の事を思い出す。

そういえば今日、学校で後輩に手紙を貰ったのだった。

平志との壮絶な激闘（もちろん格闘ゲームのである。）ですつ
かりと忘れていた。

どうせ断るからと云って彼女の大切な気持ちを無視するのも申し
訳ない。手紙くらいは読むべきだろう。

「たしかここに……」

鞆から手紙を掘り出すと、破れないように慎重に開けて中にある
ものを確かめる。

淡い桃色の便箋が一枚。
びんせん

つい扱いが丁寧になってしまふ。全国の大多数の男子達と同じよ

うにこのような物を貰うのは翔悟は初めてだった。

翔悟は至って普通である。特にスポーツが上手いという訳でも、成績で上位に入る程の頭脳もない。

あまり自慢できるものではない翔悟自身、自分を冴えない全国男子の一人だと自認している。

そんな自分を好いてくれたのだ。その気持ちを無下にするというのも失礼に当たるといふものだ。

断るとしても彼女の気持ちは受け留め、その上で断ろう。と、翔悟は柄にもなく真面目に手紙を読む事にした。

翌日。期末試験も終り、授業も来期の予習を兼ねた時間潰しのよなもののばかりだった。中には自習と黒板にデカデカと書き、教員はどこかへ行ってしまうというような授業まであった。

昼食を食べ午後の授業もゆつたりと過ぎてゆき、気が付くと放課後。

六時限目の終りを知らせるチャイムに合わせ翔悟は大きく伸びをする。

これで土日挟んで来週いっぱい通えば、金曜日には終業式だ。多くの学生が待ち望む夏休み。

翔悟も人知れず待ちきれないでいる。

「やい翔悟お。」

「お前どうせ暇だろ？」

「羽宮も放課後どっか行こうぜ」

平志が数人の男子と遊びの誘いを掛けてくる。
翔悟としては是非とも参加したかったのだが、残念ながら今日は大事な用事がある。

「悪い。今日はちょっと用事があるんだ。」

「なんだよお、しょうがねえなあ。」

「また今度誘ってくれ。」

ひどく残念がる平志は少し面白かったが、今回の用事は外せない。

「わかった。じゃあまた今度な。」

「ああ。ごめんな。」

「気にすんなって。夏休みの間にまた呼びつけてやるよ。」

そう言って平志はさっさとグループと共に教室を出て行ってしまった。

こういう時は平志のさっぱりした性格が助かる。

「さて、と。」

どうしようかと考えていると、今まで自分の席で帰り仕度をしていた柴奈乃が近寄ってきた。

「翔ちゃん。」

「ん？」

彼女は何かを考えているような難しい顔で名前を呼ぶ。

「あの…用事って、その…アレの事？」

「アレ、って？」

アレ、とはなんだったか。昨日、何かアレで通じ合うような秘密を共有しただろうか？

「えっと、昨日のあの娘の…」

そこで初めて合点^{がてん}がゆく。

柴奈乃は翔悟が手紙を貰った時、すぐ傍に居たのだ。しかも手紙を読ませるとしつこく迫ってきていた。

そんな事を思い出し、簡単に説明する。

「あ…ああ、そうそう。昨日の…、一井さん。告白、受けるにせよ断るにせよ、やっぱり本人に直接言わないと失礼だからな。」

そこまで言うと、そっか…と、一人納得する柴奈乃。

「じゃあ私は今日は一人で帰るね。」

「ん？ああ、悪いな。気を付けて帰れよ？」

「翔ちゃんは悪くないよ。…でも、翔ちゃんのそういう所、私嫌いじゃないよ。」

「なに言ってたんだ。」

「えへへ。」

恥ずかしがりながらくると翻ひるがえった柴奈乃は、一度だけこちらを見て笑うと廊下へ消えて行った。

その瞬間、また昨日と同じもやもやとした感情が湧いてくる。緊張しているせいかと思い、深呼吸で不安を振り払う。

これから一井後輩に会いに行き、彼女の自分に対する想いへの答えを伝えに行くのだ。

何も緊張する事ではない。むしろ彼女の方が自分よりも不安なにとだろう。早く答えを聞かせ、少しでも楽にさせてやるのが、せめてもの優しさというものだ。

廊下の南北両端にある階段の北側から降り、一階を歩く一年生を捕まえ一井 珠胡の教室はどこかと聞く。

運良く彼女の知り合いを捕まえる事ができたようで、彼が言うには、彼女が所属する1年A組の教室にまだ居るらしかった。

「ありがとう。」

教えてくれた後輩に感謝し、目立たないように静かに教室を目指す。

しかし、2年生とはいえ上級生である。いやでも気付く1年生の視線がチラホラと刺さるむず痒さが全身を撃つ。

これならば一度上階に引き返し、A組に近い南側の階段から目指せば良かったか。と、後悔する。

よりにもよってA組から遠い北側から来てしまうとは失敗だった。

この高校は毎年AからGまでの七クラス分の生徒数を採る。しか

も校舎は途中で折れる事なく一直線に教室が並ぶため、短距離走のコースも斯くやという長さの廊下になるのだ。

そんな長さであるから必然と歩く時間も増える。一纏めで覚えやすい地形ながら、この時ばかりはその分かりやすい一本廊下を恨んだ。

下級生の好奇の眼差しに耐えながらようやく1年A組の教室にたどり着く。

中を覗くと、一井 珠胡は友人と思しき女子数人と雑談に華を咲かせているようだった。

あの状況から呼び出すのも気が引ける。

ここまで来て怖気づくとは我ながら情けない。
自然と溜息が出てきてしまう。

「すいませーん。」

このまま突っ立っていても埒があかないので半ば自棄^{やけ}になって呼び掛ける。

（許せー井さん！）

教室の注目が一気に集まる。さっさと要件を済ませるとしよう。

「この教室に一井 珠胡さんって居るかな？」

探し人の名前を聞いた瞬間に教室内の注目が翔悟から女子グループの一人へと移る。

居る事は知っていたが、いい呼び文句が思い付かなかった。無難

に探している事だけを強調したつもりだったが、当の彼女自身としてはあまり歓迎できるものではなかったらしい。

「うわっとうっ」

耳まで真っ赤にした一井は急いで駆け寄ってき、翔悟の腕を無理やり引つ張って教室から離れる。

どこへ向かっているのか聞いても反応は無し。

とりあえず引つ張られるがまま彼女の後を着いていく。

校舎の入り口を脇に入っていくと、屋外用の体育用具倉庫がある。それを過ぎると裏門もあるのだが、ここは舗装されていない竹林が広がるばかりで、授業の一環で利用する時以外は人の出入りは皆無である。

その所為^{せい}か、学生が至る所に蔓延^{はび}る校内でもやはり人の気配は無い。

「えっと…ご、ごめんね。急に呼び出したりして。」

「いえ！あの…羽宮先輩からお返事下さるなんて…その…嬉しい、です。」

「あー、うん。えっと…」

一言言えば済むのだが、こういう場面になると本当に言葉が出ないらしい。

（これは人の告白体験は馬鹿にできないなあ。）と一人で考えていると、待ちきれなくなったのか一井 珠胡が真っ赤な顔で窺ってくる。

「あの…先輩？」

「！-！」

これはもうさっさと行って済ませるしかないだろう。

「あの…手紙ありがとう。読ませてもらったよ。」

できるだけ優しい口調で言う。

「読んでて凄い一井さんの気持ち、伝わってきた。こんな俺を好きになってくれて、ありがとう。」

彼女は翔悟の少し遠めの言い回しに不安を覗かせる。

「えっと…その…」

「……………」

何を予感したの俯いてしまう珠胡。

「その……………いい、よ」

「……………え？」

「付き合ってもいいよ。いや、一井さんさえよければ…付き合っ

…ください。」

珠胡が驚いた顔で見上げてくる。翔悟は彼女の希望を呑んだのだ。

昨日、帰宅後に珠胡の手紙を読んだ翔悟は驚いた。

別にこのような恋文を読んだ経験は無いのだが、10cm四方の小さな便箋には珠胡の精一杯の気持ちが拙い^{つたな}字で書かれていた。

断ろうと思って読んでいたのだが、彼女の気持ちが手紙から手を伝って直接心に響いてくるようだった。

こんなにも他人に自分の想いというものを伝えようと必死な文を、翔悟は初めて読んだ。

確かに文法だとか言い回しだとか、国語の評価にあてれば決して良い文では無かったろう。

が、そこに書かれた気持ちは真っ直ぐに読んだ相手に飛んでいく。そんな確かな”想い”がその手紙には載っていた。

こんなに好かれているのに、大した理由も無いのに断っていいのだろうか？

ここまで自分に気持ちを伝えようとしている彼女を切り捨てる、自分はそんな大それた人間なのだろうか？

違う。断じてそのような人間ではない。自分はこの娘^この気持ちを踏みにじれる程の人間でも無いし、ましてやこんなにも一途な娘に相応しい相手でもない。

ならばどうするか。

迷った挙句、翔悟は付き合う事にした。付き合っ^なて自分という人間を見てもらおう。見てもらって尚自分の事を好きでいてくれるなら、自分はこの娘を幸せにしてあげる必要がある。

それはほんの数ヶ月かもしれないし、もしかしたら一生を捧げる事になるかもしれない。

しかし、彼女の手紙きもちを読んで決めた。他人を愛するという事がどういう事なのかはまだ分らない。

けれど、もしかしたら、今のこの気持ちが誰かを愛するという事なのかもしれない。と、翔悟は思う。

何を言われたのか理解するのに数分の時間差を置いて珠胡は何事を言おうとする。

「あ、あ…、ああ……あの……………」

唇が震え何を伝えようとしているのかは分からないが、おそらく気持ちが動転しているのだろう。

「あ…あのっ」

「うん。」

彼女の言葉を待つ。時間にとほんの数秒だろう。だがその数秒が永遠にも近い時間に感じられる。

「あの…これか——」

「いやー惜しかったわー。さっきのパスコースでならもつと前でもよかったかもなー」

「らっ
と」

「…?!?!?!」

ドサッ

「おいつ!？」

珠胡が何かを言おうとした瞬間、すぐ後ろの方で運動部の生徒らしい話し声が聞こえる。

それに完全に不意打ちを喰らった形の彼女は、あまりの驚きに失神してしまった。

直後に陸上競技などで使うコーンを持った男子生徒達が校舎脇の曲がり角を曲がってくる。

彼らは体育倉庫へ向かう途中だっただろうが、運悪く(?)少女が倒れている現場に鉢合わせてしまったのだった。

「「「……………」」」

「あー……………」

少女が倒れており、目の前で慌てる男子生徒。

傍からみればあまり良いシチュエーションではないだろう。

驚く彼らの眼がだんだんと怪しい物を見る眼になってゆく。

「えっと…」

「「「……………」」」

「だれか手伝ってくれませんか？」

時刻は日が傾き夕暮れに差し掛かるつかという時刻。
遠くで豆腐屋のラッパの音が静かに鳴り渡る。

? Side Story・柴奈乃：私のキモチ

あまりの衝撃に思考が停止する。

今しがた聞いた事は本当なのか。今自分は現実にいるのか。もしかしたら夢ではないのか。背中を預けていたコンクリート壁から離れ、呆然と立ち尽くす。

自分の願望が見せる自分の夢の中の自分を第三者の目で自分で自分を見ているだけなのではないのだろうか。

だめだ、頭が混乱している。おそらく正常な思考を行えていないだろう。

自分でも判る程に頭の中を黒い靄が埋め尽くしている。

とりあえず落ち着こう。

落ち着いて、現状を把握し、落ち着こう。

急ぎ足で一人になれる所を探す。

意識はしていなかったが気付くと人気ひとけの少ない三階の女子トイレの前に立っていた。

扉を開け、手洗い場の前に立つ。壁に埋め込まれた化粧直し用の鏡に映る姿は酷く狼狽している。

最初の感想は、自分もこんな顔をするのかと、少し驚いた。

次いで先ほどの出来ごとを思い出す。

小さな頃からずっと一緒だった幼馴染が、後輩の告白に頷いた。

別段予想していなかったわけではない。

むしろあの無神経そうで、実のところ優しい幼馴染は、きっと、

可愛い後輩の気持ちを受け入れるとさえ思ってた。

そうだ、予想していたのだ。彼が彼女と付き合うことになる事など。

そして用事を終え校門まで来た彼を驚かし、二人が付き合う事からかい、いつもと変わらないようにバイバイと言うつもりだった。

なのに、なのに今、目の前で鏡に映る自分はどうしたことだろう。涙で顔をくしゃくしゃにして、とてもいつも通りとは言いがたい顔をしている。

この気持ちはなんだろう。苦しくて、切なくて、心のどこかが欠けたてしまったような、この気持ちは……

「私……。どうしたんだろ……」

タマちゃんは可愛いくて好きだ。翔ちゃんはカッコよくてぶっきら棒で無神経な所もあるけど、でもとても優しいところが好きだ。好きな人と大好きな人が付き合うなら、これ以上の組み合わせはそうそう無いだろう。

祝福してあげたい。まだ自分たちは大人じゃないけれども、だからこそ人生の中の幸せな一ページになるような。そんな関係になつて欲しいと思う。

二人を祝福したい気持ちは本当なのに、どこかで違う感情がそれを阻止している。

こんなに苦しくなった事は今まで無かった。いつも悲しいときは翔ちゃんが不器用な言葉使いで慰めてくれた。嬉しい時は翔ちゃんも一緒に喜んでくれた。怖くて泣きそうな時は力強く励ましてくれ

た。

そして今回は私が翔ちゃんとタマちゃんの事を喜んで、祝福してあげなければならぬ筈だ。

「ぐすつ……………」

スカートのポケットからハンカチを取り出して涙を拭く。

少し目が腫れてしまったが少し寄り道すれば、家に着く頃には引いている筈。

大きく深呼吸して鏡に映る自分を睨みつける。

「何やってんの私！シャキツとしなさい！」

自分に向かって喝を入れる。

これできつと大丈夫。次に会った時は多分、二人が付き合う事を翔ちゃんから知らされるだろう。

そうしたら、意外だと喜んで、がんばるんだぞと励まして、おめでとうと祝ってあげるんだ。

「……………」

でも、今は、今だけは、決壊した心の堤防が塞がって無い今は、感情に任せてもいいよね？

（放課後の学校って不思議な場所だよな。こんなにも嬉しい事や悲しい事とかが沢山起こる場所って、そう多くないんじゃないかな。）

柴奈乃はそんな事を誰かが言っていたのを頭の片隅で思い出しながら、感情の濁流に流されていった。

? Side Story・珠胡：ワタシの気持ち

目が覚めるとそこは見覚えのない部屋だった。身体を起こして辺りを見回す。

白を基調とした棚やテーブルに椅子。ベッドの鉄枠もシーツも、窓に掛かるレースのカーテンまでも全て白い。

部屋の外からは時節、人の話し声が通り過ぎるのが聞こえた。

（あ、保健室……かな？）

ようやく思考能力が通常に戻ってくると、自分が羽宮先輩の前で倒れてしまった事を思い出す。

（まずいなあ……きっと先輩に迷惑掛けちゃったよねえ……）

昔から周りに、気の弱い子だからかわれて来たが、まさか好きな人に告白する（正確には、手紙を渡したただけなのだが……）と云う大業を成し、あげく了解を貰った際に気を失ってしまうとは。

考えただけでも自分のした事に怖くなり、土壇場の気の弱さに泣きたくなる。

（きつと運んでくれたのは先輩だよね………それって、……つまりっ！？）

運ばせてしまった事に対して申し訳なさや打ちひしがれていると、思考があらぬ方向へ飛んでしまった。

（つ、つまり……アタシの事を先輩が……お、お、お姫様だっ……こ？
……）

そんな事をしてくれたのかどうかは判らないのだが、珠胡の思考は今やブレーキを無くした暴走特急と化していた。

（ああ……どうしよう……抱っこされてここまで来たって事は誰かに見られたんじゃない……はっ！案外重いだなーとか思われてたり……はあ……）

もういつそのまま、ずっとベッドで包まって居たくなった。

でも、と思う。お姫様抱っこだ。恥ずかしさとせめぎ合う程の嬉しさもこみ上げてくるのだ。

（はあ……先輩にお姫様抱っこ……）

思わず一人、ベッドの中でくねくねしてしまう。

本人は気付いていないようだが、外から見るとシーツの芋虫がくなくねと身悶える様は異様を窮めていた。

「えっと……もう大丈夫？」

「ひっ!？」

瞬間珠胡はビクッと跳ねて硬直する。

遠慮がちに誰かが声を掛けてきた。今までどこに隠れていたのか。

たしか保健室の先生は女の人のはずだから、今しがた掛けられた男の声は恐らく、先輩だろう。それ以外にわざわざ保健室で寝てい

る自分へ声を掛けてくれる人に心当たりは無い。

「……………」

「……………」

重たい沈黙が垂れ混める。

このままではただの変質者になってしまう。珠胡は意を決し、シートから顔を半分だけ出して返事をする。

「だいじょうぶ…です。」

「そっか。」

そこには居たのはやはり知っている男の人が立っていた。これと違って目立たない外見をしていて一見するといつも不機嫌そうだが、その実とても優しい人だ。

ワタシの大好きな羽宮 翔悟先輩。

彼は珠胡の寝るベッドの横にしゃがみ、今は安否を気遣うように心配そうな、それでいて安心したような表情を浮かべている。

そんな顔をされてしまうと、珠胡は迷惑を掛けてしまった申し訳なさと、心配してくれる嬉しさで、もう意識を保つのが難しい。

「あ、あの……………」

「どうした？」

口を開いたのはいいのだが、何を話せばいいのか分からない。やっぱりワタシには無理だよ。今にもどこかへ飛んで行って

しまつのではないかと思えるほど鼓動が高鳴る。

「あの……よつ、よろしくお願いいたしまひゅ！……っ！」

やってしまった。さっきの翔悟の返事に対する返事だったのだが、肝心の締めの一文字を噛んでしまった。恥ずかしさで視界が滲む。

珠胡の言葉を聞いた羽宮先輩はきょとして目を丸くする。

やっぱりダメだね。こんな臆病な女の子なんか、男の人は嫌いだよね。もういつそ消えて無くなりたい。

つい癖で俯いてしまい、これでは先輩の顔が見えないのだが、珠胡はこれでもいいやとどこか安心する。

「あの、せんぱ——」

「ああ。これからよろしくな。」

「……え。」

「だから、こんな俺だけど、これからよろしくな。」

「はあ、え、ええええええ！」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまつ。

「どうしたんだよ？俺がキミの告白にOKしたんだ。だったら俺達は今日から付き合い始める。別におかしくないだろ？」

「あ、あゝ、ああ、はい。そ、そうです…よね？」

「そつだよ。」

夜の涼しさに心を和ませながら、珠胡は自室の窓から宵闇に映える三日月を見る。

あれから今に至るまでの記憶はちよつと朧気だ。おぼろげ

もう大丈夫だからと一人で帰ろうとした珠胡を羽宮先輩は、一緒に帰ると言つて珠胡の言い分を聴いてくれなかった。

結局、家までは電車を乗り継いだりと遠いので、駅まででお別れする事になったのだが。

（どうせなら家まで着いてきて貰えば良かったかも――）

自分で遠慮しておきながらそんな事を考えるのであった。

しかし未だに信じられない。あの先輩と付き合う事になってしまふなんて。

こんな自分が誰かに告白して、しかもあつさりと了解を貰えるとは、正直考えていなかった。

（でも――）

しかし実際は二人は付き合う事になって、先輩も仕方なくというよりむしろ望んでという風なのだから、珠胡としてはこれ以上ない結果だ。

いや、まだ始まってすらいない。自分の甘い幻想を振り払って諫める。

（ここからよ！珠胡！）

嬉しさと共に生まれた微かな不安で自制を強いる。

そして、この恋が上手くいく事を亡き父に願って、珠胡は夢の世界へと落ちていった。

オワリの始まり：Count？

暑い。いや、熱い。足元には太陽に熱っせられた砂がどこまでも続き、周りにはこれでもかと人でごった返している。引いては押し寄せる波と人。

8月某日。翔悟たちの暮らす町から程近いシーズン中の海。

今は午前を過ぎ、昼食でも摂ろうかという頃。

翔悟はビーチパラソルで影を作り、その下に敷いたシートの上で座っている。ただだ。

訳も分からないまま連れられ今、ここにこうして座っている。

「おうおう。モテ男がこんな所で何やってんだよ！」

今回の主催であり元凶である平志が、浜辺から変な嫌味を言っ
絡んでくる。

がつくりと肩を落として溜息を吐く。

平志の近くでは、柴奈乃と珠胡がバレーボールを打ち合っている。
周りを見渡すと知った顔がちらほら。

翔悟たちは今、海へ遊びに来ていた。

事の起こりは昨日、平志からの一本の電話だった。

「よう！明日海行こうぜ。海！」

「はあ？」

「じゃ、用意しとけよな！」

「あ、ちよつ、待てつて——」

プツッ、プツプツプー……

珠胡との何度目かのデートで、デートコースで有名な公園を散歩している時の突然の誘いだった。

用意しとけて……。今しがたまで繋がっていた携帯を苦い顔で見つめながら考える。別に用意自体は問題無いのだが、いくらなんでも突然海へ行こうとはどういうものか。

いくら友人とはいえ、あまりに突然だ。翔悟としては無視してもよかったのだが、と考えていたら珠胡が不思議そうに聞いてくる。

「どうしたんですか、先輩？」

「あー、いや。」

隠すほどの事でも無いので友人から海に誘われた。と簡単に（実際その程度しか情報がないのでこれしか言えないのだが…）説明する。

すると突然、珠胡が身を乗り出して、顔をずいと近付けて鼻息荒く迫ってくる。

「あ、あの！それ、ワタシも着いて行つていいでしょうかっ!？」

「えっ」

なんと、着いてくるんですか珠胡さん。

珠胡の希望でその日は急遽、水着の購入が予定に割り込んだのだ。
った。

かくして現在。目の前の海辺では柴奈乃、平志、珠胡（あとなんかクラスの知り合い数人）が楽しそうにきゃっきやつふふと青春を謳歌しているのである。

なぜ翔悟だけ一人寂しく見物組に居るのは面倒なので説明は省く。

（これはこれで…）

一人でシートに座りながら、みんなの姿を眺める。ボールを打ち返す度に弾む健康的な身体。

柴奈乃はやはり、男子たちから密かな評価を受けているだけあり、スタイルは出る所が出ており締まっている所は締まっていて、なかなか魅力的だ。白地にピンクの花柄のワンピースタイプと、明るい色合いのパレオの組み合わせも相まって色々と眩しい。

珠胡も小柄ながら案外胸がある（着痩せするタイプなのか、今ま

で気付かなかった……)みたいで、動作動作の合間に揺れる胸が視線を誘う。彼女なりの懸命な主張なのだろうか、割と際どいビキニが目を放せないという意味では、魅力的と言えば魅力的だ。

他にも女子は居るのだが、あまり会話しない女子をじろじろ見るのも気が引ける。が、やはり健全な男子学生としては十二分にアリな光景だ。

冷えた清涼飲料水を一口流し込む。外の暑さに対抗するように喉が潤うるされる。

珠胡を連れて行く事になった時、最初はどうなる事かと思っていたが、予想とは裏腹に平志たちは珠胡についてあまりからかわなかった。軽い自己紹介程度で済んだのには少し戸惑ってしまったくらいだ。

数人のクラスメートを除いて、どうも知っていたような嫌いがあるようで、あまりそこには触れないでおいた。

下手に突っ込んで墓穴を掘る羽目になるのはごめんだ。

そんなこんなで翔悟、柴奈乃、平志、珠胡を含めた平志主催の2年B組仲良しツアー(仮)は、早朝7時、総勢8人という団体で幕を開いた。

今まで浜や海で遊んでいたみんなが引き挙げてくる。どうやら遊び疲れたようだ。

「いや、盛り上がった盛り上がったー！」

先導を務める平志が元気な笑顔で言う。今日はいつにも況して機

嫌が良い。

奴の目的は大体察しが付く。大方、同じクラスで今回も来ている川内^{せんだい かな} 佳菜との仲を近づけようとしているのだろう。翔悟から見てもポニーテールが似合う可愛い女子。と、いう印象があるくらいで、特に特徴は無い普通の女の子だ。

平志と川内の本人達は気付いていないが、平志が川内にデレデレなのはクラスの仲間内では有名な話だ。

本人は否定するのだが、平志の小心度も大概酷い。それを示すように、奴の思惑に巻き込まれた6人という数字が表している。

しかし。

（それに乗っかって、デートも兼ねて彼女連れてくる俺も大概だなあ……）

柴奈乃と自分は平志とよく話すので直接呼ばれた。柴奈乃は最初遠慮していたらしいが、平志が凄い勢いで頼むものだからつい承諾してしまった。と、これは柴奈乃本人の言で、平志が言うには「柴奈乃ちゃんがいれば面子^{めんつ}にも華が出るだろう？」とかなんとか。よくわからん。

他の四人は、そちらはまた四人組でよく遊ぶ面子で、その内の一人が平志の目当ての川内さんであり、一人が平志の部活仲間という事で半分合同ツアーみたいな事になった。

向こうの4人は男女半々のバランスなのだが、そのうちの二人がくっ付きそうな雰囲気であったみたいだから、平志の部活仲間が気を利かせてこうなったとも翔悟は読んでいる。

うだうだと考えていると、いつの間にか隣に柴奈乃が座っていた。

「みんな先に海の家に行っちゃったよ？」

「おう。」

海水で濡れた肌が艶を持ち、妙な色っぽさを感じ慌てて目を逸らす。

こうやって二人きりで話したのは夏休みに入ってから初めてだったか。そういえば最近、柴奈乃と会ってなかった事に気付いた。

柴奈乃がこちらを見ずに海へ視線を向けたまま話したす。

「楽しいね。」

突然話し掛けられて、少し意表を突かれる。

「ん、あつ、ああ。そうだな。」

「もう、大丈夫？」

「ああ、もうとっくに大丈夫だ。昼食ったら俺も参加する。」

「無理は駄目だよ、熱射病だったら大変なんだから。……………あのね、翔ちゃん。」

「ん？」

「タマちゃんの事、平志くに話したの、私なんだ。」

「ああ。……知ってるよ。」

「えっ……」

「どうせ、しつこく聞かれて思わず。だろ？」

「えへへ。全部お見通しだね。」

「当たり前だろ。お前の事なんかなんでも知ってるよ。」

「……うん。」

柴奈乃は伸ばしてた脚を畳んで腕で抱く。

「あのね……驚かないで聞いて欲しいんだけど……私ね……」

「ん？」

「私、もしかしたら——」

「せーんぱーいっ」

柴奈乃の声を遮るように、両手にイカ串を持った珠胡がこちらへ走ってくる。

後輩であり、現在彼女でもある少女に手を振る。

「話しは後で聞いてやるよ。行こつぜ。もう俺も腹がペコペコだ。」

立ちあがり、柴奈乃へ手を差し出す。

「……うん。」

頷いた柴奈乃は一瞬珠胡を見て一人で立ち上がる。

「お二人とも何してるんです？ 早く食事にしましょう！」

「ああ、そうだな。それくれ。」

「どうぞ！」

珠胡の持っているイカ串を貰う。

「栗崎先輩も行きましょう！」

「そうだね。ごめんね、わざわざ。」

「いえ！ワタシは別に。さっ、翔悟先輩！」

珠胡が空いた手で翔悟の手を引く。

そんな二人の後を少し後ろから柴奈乃も一緒に歩いて行く。

海の家では、テーブルの一つで平志が山盛りのかき氷と格闘している処だった。

§

同じ頃、某国防総省。

「これはどういう事だっ！」

いくつもの輝かしい勲章が飾り着けられた制服に身を包む恰幅の
良いを男が、手に持った書類をデスクに叩き付けながら顔を真っ赤
にして怒鳴った。

いつもは穏やかな表情を浮かべ、一部の怖い物知らずからは影で
<ダディ>と親しまれる彼も、今は厳しい軍人のソレだ。

「はっ！そこに記載される通り、只今全力で調査中でありまして、
詳しい事は我々の調査網によっても決定的な情報は掴めておりませ
ん。」

「だから、それが一体どういう事なのか分かっているのか！！」

「も、申し訳ありませんっ！」

恰幅の良い男が更に大きい声で怒鳴る。報告書を持ってきた軍人
は、その大きく鍛えられている体をビクツと震わせる。

日頃から厳しいトレーニングによって鍛えられた肉体は、勿論そ
こらのチンピラにはまず負けないだろう。しかし、彼は軍人である。
そして今、彼が居る施設は軍の中でも重要な責務を負った場所、国
際防衛総省。そしてその中でも更に厳格な地位に就く、国防省のト
ップに立つ国防長官のデスクがある部屋だ。

「ここに書かれている事は本当か？」

自分達以外には誰も居ないのに声を潜めて聞く。

「はっ！分かっている範囲では、その書類に記載されていることが
事実であり、よもや疑えない現実である事は、残念ながら変えられ

ない真実でありますっ！」

「難しい言い回しは止せ、私はそういうのは好きではない。うーむ……」

それだけ言つと長官は黙つて考え込んでしまった。

だがそこは国の命運を一部なりとも任された人間である。数分すると、頭の中でまとまった指令を飛ばす。

「……………わかった。引き続き調査の続行と、今後の対策の検討。これ以上の侵攻の阻止。それと、考えうる全ての可能性を洗い、必ずや犯人の特定、確保をしる。情報の漏洩は最小限に防ぎ、この事は極秘に進めるんだ。大統領には私から報告しておく。」

「はっ！承知しましたっ！」

男は敬礼をすると報告書を持ってきた道を戻って行く。

まいった。国防省の長官に就任してから5年になる。

国の発展と共に、常にこの国はテロの脅威に脅かされてきた。

しかし、自分が就任してから今まで、特に活躍の場は無かった。

男としてはそれでよかった。軍人の活躍の場が無いという事は、この国が平和である。と、いう事である。

軍のトップの人間が暇という事は、それはとても良い事だと考えている。

だが、先程届けられた書類に目を通した男は目を剥いた。

そこに書かれていたのは信じられない言葉だった。

“各地の核ミサイル発射施設、及び外部とのコンタクトが一切遮断

された。”

と、いう途方もない馬鹿話のような内容だった。

こんな冗談は、彼が子供の頃に週末のパーティで親戚の伯父言っていた、巨大なネズミがパイを丸飲みにした。と、という話を聞いた時以来だ。

信じられない事に、乗っ取られた当時の施設内の職員達は皆、何らかの理由で外に出されていた。と、いう話であるらしい。とてもじゃないが信じろという方が難しい。

つまり現在、施設内は無人であり、外部からの操作もこちらからは出来ない。

国内でも重要な防衛対象にも拘わらず、陸の孤島と言っても差し支えない状態だ。

こんな事があつては国の威信に関わる。早急に対応しなければ。国防総省のトップの椅子に座っていた男はそこまで考えると、意を決して大統領へと訪問の電話を掛けるのだった。

§

午後を過ぎ、日も沈み始めた夕方。そろそろお開きといった雰囲気になり、海へ来てた客もすっかりいなくなっていた。

昼食を食べ、食後の休憩をし、またみんなで少し遊んだ後は各人自由行動という事になった。

平志は川内を連れてどこかへ行ってしまった。

平志の部活仲間の男子は、俺の相棒を探しに行くと言って一人、
出会いを求めて消えていった。

カッパル直前の二人は、探した時には既にどこかへ行ってしまった後だった。

仕方ないので残った珠胡と柴奈乃、それと自分の三人で浜辺でも
歩こうと提案した。

「……………」
「……………」
「……………」

重い。

翔悟を挟んで右に珠胡、左に柴奈乃という並びなのだが、どうに
も先程から空気が重い。

珠胡の顔を見てみると、さっきまであんなに元気だったのに、今
は難しい顔をしている。

柴奈乃は、彼女は彼女でどこか寂しそうな表情でずっと下を見て
歩いている。

（何かまずったかな……………）

どうにもこういう時の経験が無い翔悟は、打破すべき手立てが
見いだせず、三人はかれこれ3時間は歩いてた。途中、砂で城を作
ったり、迷子の子供を親と引き会わせたりとハプニングも幾つかあ
ったが、この時間になるともはや人影は疎^{まば}らだ。

そろそろ海岸も端が見えて来て、ゴツゴツとした岩場が姿を見せ
始めた。

あそこを探検してみようと提案しようとすると、柴奈乃が早口に

切りだす。

「私先に戻ってるね。」

「えっ？」

「私、二人の邪魔だよ。先に戻ってる。」

柴奈乃は無理をしているのがはっきり分かる作り笑いでそう言い、さつさと戻っていつてしまった。

「あ……………」

翔悟は言葉が出なかった。別に気が利いたセリフを思い付かなかったのでは無く、柴奈乃の言葉があまりにも鋭く翔悟を刺し貫き、その衝撃に言葉が出なかったのだ。

「…………先輩。あの。」

しばらく黙ってた珠胡が、申し訳なさそうに声を掛けてくる。その表情はとても辛そうだった。

「何？」

即座に返事をしようとしたが、上手く声が出なかった。少しキツイ口調になってしまった。

「えっと……………」

「ごめん。どうしたの？」

珠胡に謝って先を促す。^{うなが}

「あの、ワタシが言えた事じゃないんですけど、その……」

珠胡は言い淀みながらも懸命に言葉を続ける。^{よど}

「栗崎先輩はきつと、翔悟先輩の事が好きなんです。」

「えっ……」

「でも、ワタシが翔悟先輩の傍にいるから、その、とても辛いんだと思うんです。」

「……………」

「先輩、羽宮先輩の所に行ってあげてください。」

頭が真っ白になるとはこういう事か。最初、何を言われているの分からなかった。

今まで柴奈乃と友人以上になる事も考えた事はあったが、結局今まで何事もなく仲良く付き合えてきた。その事になんの疑問も浮かべずに一緒にいたのだが、今日の前に立つ後輩はそれは違うと言っている。

しかもその後輩は現在、自分と交際する彼女だ。

一体何が起きているのか分からなかった。

「ワタシは別に……いいです。それよりも好きな人が困ってるのはとても辛いんです。今の先輩の顔、凄い悲しそうです。」

「……………」

「ワタシ、最初は栗崎先輩の事、邪魔な女性ひとだなんて思ってたんです。」

「そんな……………」

「でも、先輩と付き合いだして分かったんです。あの女性ひとは心の底から先輩が好きで、先輩も本当の部分ではあの女性ひとが好きなんです。」

「そんな事は……………」

「ワタシ驚きました。覚えてますか？先輩に手紙を渡した時。あの時、先輩を翔ちゃ…ん…なんて呼ぶような人が先輩の傍に居るなんて、考えもしてませんでした。」

「だってあいつとは、幼馴染で……………」

「しかも次の月曜日にはわざわざおめでとつを言う為にワタシを校門で待っててくれてたんですよ。」

「たしかあの日は友達との約束で遅くなるって……………」

「違います。」

「……………」

「栗崎先輩は翔悟先輩の事が好きだから、だからあそこまで出来る

んです。」

一気に言われて頭がパンクしそうだ。
一体何が起こっているんだ？

「ワタシは翔悟先輩に気に入られようと必死で、先輩が何を考えているかなんて全然考えてませんでした。今だってそうです。ここまでする間、どうしたら先輩と二人きりになれるか、ずっとそれだけを考えてました。なのに……」

いつも引つ込み思案な態度であまり自己主張しない、よく言えば従順な後輩だとは思っていた。が、そんな彼女がこんなにも自分の思っている事を言うのは初めてだ。

翔悟は未だにショックから立ち直れないまま、彼女の言葉を聴く。

「なのに、あの女性^{ひと}は、先輩とワタシに気を遣って一人で帰ったんですよ。」

「そんなんじゃないよ。どうせあいつの事だからトイレにでも――」

「先輩は聞こえなかったんですか！？栗崎先輩は、二人の邪魔になるから一人で帰るって、そう言ったてんですよ！」

「……！！」

今度こそ、一気に足元が崩れたと錯覚した。

もう何が本当で何が嘘なのか分からない。

あの、自分と珠胡が付き合う事を報告した時の、本気と思える激励は嘘だったのか？さっきまでの楽しく遊んでいた姿は幻なのか？信じられない。

「——っばい、先輩！聞いてください！」

ほんの一瞬、意識が遠のきかけたようだ。焦点を珠胡に合わせる。

「だから！先輩は！栗崎先輩の所に行つて上げてください！」

「え？」

「ワタシは先輩が好きです。その先輩が苦しんでいて、その理由が分かつてるなら、ワタシに先輩を助けさせてください！先輩は今、栗崎さんの所に行くべきです！」

彼女の声に反応して、自分でも分からず走り出していた。

しかし、こんな所に珠胡一人を置いていくのは危ないと思い、振り向く。そこに立つ彼女の表情を見て驚いた。彼女は泣いていた。今まで必死に堪えていたのだろうか。滝のように流れる涙が頬を伝い、顎を先端に流れ出ていた。

「ひぐっ……行つてくださいー！」

彼女は泣きながら言う。そんな彼女に何か言おうとしたが、何も思い浮かばない。感情のままに任せる事にした翔悟は思い切つて言う。

「ありがとう。」

「ううっ……」

「そんで、ごめん。」

そう言うと、彼女は泣いた顔そのまま太陽のように笑う。
そんな彼女を見て、不甲斐無い自分が嫌になり、強い彼女が羨ましくなった。

「行つて来る。」

「がんばってください。」

「今度のデート。珠胡ちゃんの好きな所に行こう。俺のご機嫌なんかきにしないでいいから。」

「…えっ？」

「俺らまだ、別れたわけじゃないだろ？」

珠胡は驚いたように目を丸くする。今まで強がって笑っていたのか、今度こそ本当の笑顔になる珠胡。

「ワタシ、先輩のそういうところが嫌いだけど、大好きです。」

「じゃ、また後でな。」

「はい。」

太陽はもう3分の1が沈み、そろそろ夜だ。西の空は夜の色を拡げ、西の空は朱く染まっている。

人間が出したゴミだらけの砂浜を走るのは、想像以上に危険だ。だが今はそんな事などどうでも良かった。

こんなに爽快な気分は久しぶりだった。走らないのであれば飛ぶしかない。そんな気持ちだ。歩いてなんかいられない。

一途で臆病で観察力があり、そのうえ人並み以上に純粋な後輩が、自分の背中を押してくれた。

先輩としても、そして、彼女に好かれた男としても、今翔悟は走らなければいけない時だと思った。

遠くに一人、ポツンと膝を抱えて座りこむ柴奈乃を見つけた。

柴奈乃もこちらに気付いて驚いている様子だ。周りを見回し何かに^{すが}縋るかのように後ろへ手をやっている。

直ぐに彼女の許へとたどり着く。

「どうして……」

微かに聞き取れるような、そんな小さな声で柴奈乃が呟く。

全力で走ってきたせいでなかなか息が整わない。この高鳴る鼓動が何によって^{もたら}齎されるモノかなんて今は関係無い。

太陽がもう3分の1しか残っていないような頃、やっと息が整う。その間、ずっと柴奈乃は困惑した表情で翔悟を見つめ続けていた。

「あのさ、俺、お前に言う事があるんだ。」

緊張で溜まったツバを飲み込む。

今は波の音がうるさく感じる程に、意識が集中している。

「俺さ。お前の事が好きだったみたいなんだ！」

柴奈乃は目を瞠^{みは}った。

その頬を一筋の涙が流れるのを見ながら、翔悟は言い知れない達成感を感じていた。

? Side Story・柴奈乃：私の想い

後悔はしてない。ただ、ちょっと無責任だったかな、とは思う。

翔ちゃんとタマちゃんを置いて一人で帰る途中、水平線の向こうに沈む夕日があまりに綺麗で立ち止まった。真っ赤に燃えながら沈んでゆくその姿を見て、なんだかそれが自分の心境を表しているように切なくなった。

好きな人を強く想い、燃えながら沈んでゆく気持ち。
切なくて、空しくて、悔しかったけれど、不思議と悲しくはなかった。

（これで……いいんだよね？）

自分で自分に問う。それは先程の自分がだ。

大好きな翔ちゃんとずっと歩いていたかったが、彼にはもう交際相手が居て、その交際相手である可愛い後輩も一緒だったのだ。

普通に考えて自分は、あの場では邪魔者以外の何ものでもないじゃないか。

なんだか逃げるような自分が惨めに感じ、つい刺^{とげ}のある言い方になってしまった。

集合までもう少し時間があるだろう。もう少しだけ自分の気持ちを見つめてよう。

すっかり人が居なくなつた夕焼けの射す海岸で、一人きりで座って考える。

もう平気だと思ってたが、全然平気ではなかったようだ。

翔ちゃんからタマちゃんと付き合つと言われた日。自分の中では百点の対応だったと思う。

驚いて、褒めて、激励した。

これで良いんだと思ってやったのに、あの日も直ぐに帰って自分の部屋で枕に顔を埋めた。

（全然ダメじゃない……）

いつまでも未練たらしく幼馴染を想う自分が、酷く惨めに思えて泣きたくなる。

自然と膝を抱く姿勢で夕日を見つめていた。

そろそろ戻らないと、みんなに心配されちゃう。翔ちゃんとタマちゃんももう引き返してくるだろう。

そんな事を考えながら戻ってきた方向を見ると、一人の人影が走ってくるのが見えた。

まさかと思い目を凝らすと、それは予想通り、先程別れた幼馴染がこちらへ向かって走ってくる所だった。

最初、タマちゃんはとうしたのかと思ったのだが、さっきの物言いがあまりにもヒドくて翔ちゃんを怒らせてしまったのかと思い、急に怖くなってしまった。

自然と手が何かを求めるように後ろを探る。

そんな事をしてる内にあっという間に目の前に立つ、小さい頃からずっと大好きだった男性。

目の前では彼が息を切らせて立ち尽くす。
そんな彼を目の前に何もできない自分。

「どうしてここに居るの?……」

聞こうとしたが上手く声が出ない。そのまま立ち尽くす二人。
どれだけそうしていたのか分からないが、二人で向かい合っ
て見つめ合っていると、不意に翔ちゃんが口を開いた。

「あのさ、俺、お前に言う事があるんだ。」

今更何を言うつもりなのか。それよりもタマちゃんはどうしたの
か。

この状況に戸惑い、思考回路が大渋滞だ。

彼は言い難そうに一度黙ると、直ぐに続きを叫んだ。

「俺さ。お前の事が好きだったみたいなんだ!」

それは、これから先、もう一生聞く事は無いと諦めた、諦めよう
としてた言葉。

聞いた瞬間に今まで我慢してたモノが目から溢れる。

自分の気持ちを否定して、心の整理が付くまで彼と会わないよう
努めて、必死に我慢していた涙^{モノ}。

一度決壊し、その場凌ぎで埋めた穴は、再び壊れて塞がらない。

自分が何を求めていたのか、解っていたのに判らないフリをして
きた。

けれど、今。それを決定づけるように自分へ突き付けられた答え。

溢れる想いに乗せて思わず言葉が出る。

「いいの……？ 私……あなたを好きで居て……いいの？」

感情が暴走しないように、最後の咎とばかりに手で口元を抑える。

「ああ。今までも、そしてこれから、お前が好きな俺で居続けた
いつて思った。いや、気付いたんだっ」

「でも……、タマちゃんは……どうする…の？」

自分を好きだと言ってくれるのは、嬉しい。凄く嬉しいが、彼に
は自分の為に他人を傷つけるような事はしてほしくなかった。

もしかしたら自分自身が、他人を蹴落としてまで幸せになる事を
嫌っているのかもしれない。怖がっているのかもしれない。

私は偽善者だ。本当は自分が一番在って欲しい現実を願ってる。
そう考えるとなんだか頭の奥の方が冷えていくような感覚になる。
ここで断るのが自分の最適な選択では？自分の事を好きだという、
その言葉が聞けたのだからもういいではないか？自分で自分の気持ち
ちに決着を付ける良い機会なのではないか？

「俺達は今付き合ってる。これからそうする。」

俺達。やっぱり。優しいこの幼馴染は自分を少しでも救おうと気を遣ってくれているんだ。

「だけど……」

もういい、その場凌ぎの慰めなんか要らない。

「俺はお前の事は好きなんて言葉じゃなくて、愛してる。んだと思う。」

「…じゃあ」

なんだか疲れた。心の奥の暗い部分の更に深い処、そこにある黒い何かが頭を擡もたげる。彼の優しさに甘えてしまおう。自分じゃこの気持ちに引導を渡せない。

「じゃあ、タマちゃんとわかれ——」

「だから俺は、お前とも付き合うつ！」

「……えっ？」

今なんて？

自分は、彼女と別れろと言って、拒否すればこの先話す事はあつても距離は縮まらないだろう。承諾すればそんな彼なんて嫌だと突き放す。こんな自分は彼には相応しくないのだ。だったらもつと良い女性ヒトを探して欲しい。

どちらに転んでも修復不能な道を覚悟していた。

「ちょっと待つて、今なんて言ったの？」

「俺は珠胡ちゃんの告白を受けた時、この娘こを幸せにしたいと思つた。けどそれは、自分の気持ち解とかってなかった。俺はお前とずっと居たかった。だったら、お前と一緒に居ながら珠胡ちゃんも幸せにする！」

「な、何言ってるのっ？ そんな…そんな都合のいい事、タマちゃんだって嫌だって言うよ！ 私だってそんなの嫌だよ！そんなの…」

「嫌でも！ お前なら、付き合ってくれるよな。こんな俺に、今までみたいにな。」

「っ！？」

ああ、そういえば、そうだった気がする。彼は普段は何を考えているか分からないけれど、一度火が付くと自分の決めた道を突き進むヒトだったっけ。

そんな彼の傍に近づきたくて、時々振り返る彼の優しさがとても嬉しくて、そして時々見える彼の横顔が、堪らなく好きだったんだ。

やっとここまで来れたと思った。やっと隣に立てるのかと。

悔しいけど自分とは反対の彼の隣には先に後輩が並んでたが、彼は後ろを振り返って自分へ前に来いと言ってくれている。

自分だからこそ来て良いと言ってくれている。

だったらやってみる。先輩として後輩には悪いが、女として彼女には悪いとは思うが、単なる幼馴染では無く、栗崎くりさき 柴奈乃しなのとして、やっと羽宮はなみや 翔悟しょうごの隣に立てるのなら、並んでみたいと思った。

知らないうちに笑っていたらしい、泣きながら笑うなんて初めてかもしれない。

「翔ちゃん、我儘わがままだよ…」

「ごめん。でも…」

「いいよ。分かってる。私、頑張る。翔ちゃんが納得できるように、私頑張るね」

「すまん、頼んでいいかな？」

彼は本当に申し訳なさそうにそう言う。

今更そんな顔されてもずるい。とは思ったが、なんだか彼の言葉がくすぐったくて自然と笑みが零れてしまう。

「分かった。…後でタマちゃんに謝らないとね。」

「俺から言っよ。」

「じゃあ、私も一緒に行く。」

「そんな顔してちゃあの娘も心配するからダメ。」

「イジワル…」

おもむろに彼が手を伸ばして柴奈乃の目じりを指で擦る。頬も軽く拭われ、突然の事で固まってしまった。

「これでよし」

「っ……」

顔から火が出るかと思った。今までの短い人生でこんな経験は無かったと思う。意地悪く笑う目の前の大好きな人がなんだか恨めし

くて、それでも憎めないのです、どうしたらいいか分からなくなる。

「もう！翔ちゃんの問題なんだから勝手にすればっ！」

恥ずかしさを隠すようにそっぽを向いて腕を組む。

口元が緩むのを抑えられない。こんな顔、彼には見せられない。

いい加減切り上げないと、どうからかわれるか分かったものではない。

「もう暗いから戻ろう。タマちゃんは？」

「あの娘ならしっかり者だから大丈夫だろ。」

「もう、無責任なんだからっ」

結局、二人で珠胡を探しに行ったのは無駄骨で、先に集合場所に居た他のメンバーと一緒に、珠胡から遅いと野次られるのだった。

珠胡は説明を聞き、分かりました。と頷くだけだったのは意外だった。本人曰く、こうなる事は分かっていたらしい。なんとも強い娘だと改めて、自分のライバルになった後輩を見つめた。

彼女は照れた笑みで応えてくれたが、申し訳なくて気が引ける。

そんなこんなで合同海水浴は幕を閉じた。

ちなみに平志は川内さんせんだいとは上手くいかなかったらしい。

持つ者がどうか、主人公補正がどうか、始終翔悟に絡む平志は、見ていて可哀相になると同時にオカシクて笑ってしまったりもした。

色々あったが、来てよかったと柴奈乃は思う。

強引な誘いだったが、そこはこの気さくな男友達に感謝した。

電車に揺られ流れる夕闇の空を見ながら、いつの間にか眠りに着いていた柴奈乃だった。

? Side Story・珠胡：ワタシの覚悟

最初に聞いた時はとてもがっかりした。

だけど自分の好きになった人はこういう人なんだと少しだけ、ほんの少しだけ嬉しくなったりもした。

帰りの電車の中で彼の肩に寄り掛かる。

自分より大きくて、頼もしくて、暖かい。

彼の傍に寄れるなんて、あの時は思いもしなかった。そういえば、この人を知ったのはあの時だったっけ。

まどろみの中で思い出を噛み締め、幸福感だけが自分を包む。

珠胡が目を覚めたのは翔悟が降りる駅が近づいてきた頃だった。いつの間にか寝ていたらしい。肩を揺すられて起こされた。

「俺ここだからさ、今日はここまでな。」

「…はい。」

「ごめんな。こいつ寝起き悪いから俺が送ってやらないと危なっかしくて。」

「大丈夫です。今日は楽しかったです。ありがとうございました。」

同じように寝てたのだろう。栗崎先輩が翔悟に支えられるように歩かされている。

羨ましいなあ。と思いつつも先輩の背中を手を振る。

いつも通っている高校の駅から電車でおよそ30分。閑静な住宅街に珠胡の家はある。

父が若い頃に購入した15階建てマンションの一室で、3LDKバストイレ付き。北北西に窓があり障害物もなく日当たり良好。世間からしたらなかなかの良物件だ。

しかし、このマンションを購入してすぐ、3年住んだだけで父は他界した。営業の外回りで道を歩いていた父は、不幸にも建築現場の資材が崩れた下敷きになっただけで、頭部への打撲で軽傷だったものの打ち所が悪かったらしい。

であるから、今は母親と二人暮らしなのだが元々共働きで、今は父を失った分を母が一人で補っているのだ。なかなか忙しい身で、珠胡が母親と顔を会わせるのは週に一度か二度程である。

別段寂しいわけではないが、やはり年頃の女の子である。経験豊かな人生の先輩として、もちろん母娘としても、母親とは色々話してみたくある時もある。

（ダメだな、ワタシ…）

自分の為に一生懸命働いてくれている母親の足を自分の都合で引っ張っては駄目だ。

自分の問題は自分で解決するべきだ。

帰る時間がいつもより少し遅くなってしまった。

時間は午後8時を回ろうかという時刻。門限は一応7時という事になっているが、母はいつも10時を過ぎなければ帰ってこない。

そんなに急ぐ事もないだろう。

入り口のエントランスで端末に暗証番号を入力してマンション内

へ、イスが数脚置かれたロビーの右手にあるエレベーターで8階まで行き、通路を一番奥まで行った場所に珠胡と母が暮らす一室がある。

いつものようにカギを開け、細い廊下を進めばリビングだ。途中で自分の部屋もあったのだが、なんだか喉が渴いてしまったので飲み物を取りに行く。

廊下とリビングを分ける曇りガラスが嵌め込まれたドアを押すとそこには居ないと思っていた母親が3人掛けのソファに肘を着いて座っていた。

「っ！ 珠胡っ」

「お母さんっ」

二人で驚き硬直する。しまった。と最初は思った。門限を過ぎてしまった事で絶対怒られる。どうしよう。顔が赤い、きつと怒っているのだろう。

「あんたこんな時間までどこ行ってたのっ？」

母親が疲れてように聞いてくる。嘘を言ってもしょうがないので、とりあえず簡単に説明しておく。

「あのー…、友達と、海まで…あはは…」

あまりの気まずさから苦笑い。

「はあ…あんまり心配させないで。」

「はい。すいません。」

心配させてしまった事を反省し素直に謝る。
最後の最後で大失敗だ。

「まあ無事ならいいわ。心配した自分が馬鹿みたいで良かったわ。」

「…うん」

どうやら今日はこれで終わりらしい。顔が赤いのはもしかしたら、自分を心配してくれていたのかもしれない。そう考えるとまた反省の度が強くなる。

「どうしたの？」

突然聞かれたので動揺してしまった。

「えっ？な、なんでもないよっ？何か付いてる？」

自分の顔を撫でて聞き返す。

「ん…好きな人でもできたあ？」

「べっ、別にい！？」

普段話しをしない母がいきなりギリギリの線を掠めてきたのに驚き、思わず声が上ずってしまった。

ついさっきまで怒ってたのにいっつ！

「怪しいわねえ…」

「もう！何でも無いっ！」

「……相談なら、乗るわよ。」

「っ！」

急に真面目な顔で言われると困る。そもそも母に話しても大丈夫なのだろうか。

今まであまり母とこういう話しをした事はなかった。しかも急に見抜かれるように聞かれ、状況も分からないはずなのに相談に乗ると言う。

(…。)

珠胡は数瞬悩んだ末に、相談する事に決めた。

「実はね——」

珠胡は翔悟（せんぱい）と付き合っている事、今日あった事を簡単に話した。

「うーん、つまり、あんたが最初に付き合ってた彼が、後からやっぱりこっちの方が良い！。とかなんとか言ってるってこと？」

「なんか違うけどお、大体合ってる。かな…？」

なんとも投げやりな解釈ではあり先輩を貶けなされ甚だ不本意だが、大筋は飲み込んでいるようで少し安堵する。

「じゃあ、話しは簡単じゃない。」

「そうかな？」

「そうよ」

この母親の自信はどこから来るのか。

「そんな無責任な男、あんたのほうからフツちやいなさい。それが一番よ。」

あまりの極論に衝撃が走る。

「そんなあ！……そんな事言ってもお……」

「……まったく、だったらあんたがやる事は二つに一つ！」

「二つ？」

母は指を二つ立て、丁度Vサインをする時のような手を珠胡に突き付ける。

「そう！軽い男だったって見切りを付けてスパッと別れる！」

中指を折りながら高らかに宣言する。そんな事できない。

「うう……」

「もう二つはっ……」

「もう一つは？」

変に焦らす。どうせとんでもない事を言うに決まってる。諦めながらも母の言葉を待つ。

すると眉間に皺を寄せていた表情がふっと緩み、優しい眼差しで言いだした。

「あんたが、本当に好きなら、あんた自身の魅力でその彼を振り向かせる。」

「ワタシ、自身の……魅力……？」

言っている事自体は簡単なのだが、いまいち解決策なのかと言われると首を傾げるものがある。

「結局男ってのはね、良い女に寄ってくもんなのよ。…逆もまた然り。」

「逆も？」

それは、つまり？

「そう。私の可愛い娘むすめが好きになった程の男なんだから、きっと良い男に決まってるわ。だったら、あんたが納得するまで好きにすれば良い。」

「な、何言い出すの？ お母さん今日お酒でも飲んで来たでしょ？」

まったく！何を言い出すのか。この母親は絶対に酔っている。

そうでもなければあんな恥ずかしい台詞を吐けるわけがない。

「あれ〜？バレちゃった〜？」

案の定、悪びれもせずに笑う母。

「もうっ！ おかしいと思ったのっ。お母さんがこんな時間に家に居るのなんか滅多に無いから。」

「へへへえ〜、ひっさびさに残業無かったから軽く飲んですぐ帰ってきたのよ〜」

「お母さん、お酒弱いんだから気を付けてよね。」

「分かってるわよお」

「はあ、ワタシもう部屋に行くね。」

「おうっ、悩めよ少女お〜！」

「もうっ、おやすみ！」

「おやすみい〜」

そう言っ部屋に戻る。まったく、酔っ払いに茶化されるとは。自分のベッドに座って考える。先程の母の言葉、「あんたの納得がいくまで好きにやれば良い」。自分の好きなように。

お気に入りのイルカさん人形を抱いて寝転がる。
やっぱり翔悟先輩の事は諦めきれない。本人も別れたわけではな

いと言ってくれたし、帰りでは栗崎先輩が謝ってきた。あれには流石に少し驚いたが、やっぱり良い人なんだなあと思う。

「ワタシ、頑張れるかな？」

抱いているイルカさんに聞くが、勿論返答は無し。愛くるしい丸ボタンの瞳と目が合う。

なんだか励まされている気分になって少し前向きになった。

「ふふつ、そうだね、やってみなきゃだね。」

そうだ、うじうじと考えていても駄目だ。これがまだ告白すらしていない時ならいざ知らず、既に付き合ってた彼の方も自分を一応好いてくれているのだ。

ならば当って碎けるしかない！―（碎けては駄目なのだが…）と決心する。ライバルの栗崎先輩は強敵だけど、自分だって翔悟先輩を好きな気持ちは誰にも負けてない。勿論彼女にだって！

そうして考えている内に、今日の疲れからか、珠胡はそのまま意識を手放してしまうのであった。

着替えもせずに寝たせいか、翌日の寝起きの気持ち悪さは、彼女の人生で数えられるあまり多くない最悪の寝起きの一つになった。

オワリの始まり：Count？

夏休みの最後の週。

恐らくこの週は学生という者達の個性が、最も顕著に表れる期間だろう。

学校の夏休みとは8月を含めた前後一ヶ月近い休学期間が与えられるもので、そのもっぱらの理由は最近では学生の特権というものが主だろう。

本来は真夏の猛暑による健康管理と修学との両立の難しさから設けられた期間であるのだが、いまや大概の教室や部屋には冷暖房が完備され、真夏だろうと授業を執り行うのは、決して難しい事ではなかった。

しかし、長い歴史の中で、『学生には夏休みが必要である』と、というような固定観念が植え付けられてしまったのだからしょうがない。

しかも夏休みが必要だと言う学生が圧倒的多数を占めるのだから、学生だった事がある大人もその気持ちは分かるので、無くなる道理も無いというものだ。

そして、夏休みの前に各科目から出される普段の何倍もの量の宿題もまた、夏の風物詩と化していた。

「うーん…」

翔悟は右手でペンを回しながら数学の問題集を眺めていた。

夏休みが始まる前からコツコツと消化してきた宿題も、後は修学

の問題集を数ページ残すのみだ。

平志などは今頃、去年のように大急ぎで溜まった宿題と奮闘しているだろう。

毎日少しずつやればいいのには思うのだが、背水の陣よろしく、あのスリルが堪らないのだと本人が言うのだから、翔悟自身からはそれ以上何も言えることは無い。

多分そつという人種なのだろう。宿題を最後の最後までやらない人種なのだ。

(…なんじゃそりゃ)

自分で考えて馬鹿らしくなり、思考を振り払う。

宿題をキリの良い所まで終わらせたのでまた明日。軽く伸びをし
てノートと筆記用具を片付ける。

時計を見るとまだ午前だ。今日は予定も無いし、最近はず胡や柴
奈乃に振り回されて疲れてた。

あの海水浴からしばらく、ほとんど休む暇も無く二人とつかえ
ひつかえ連れ回された。

二人ともそこまで無遠慮な訳ではないのだが、なにしろ相手は二
人なのだ。折角の夏休みだからと3日に一度くらいのペースで誘わ
れると、二人に対して体は一つなので、単純計算3日の内2日はデ
ートをしてる事になる。

さらに男としては羽振りの良い所も少なからず見せたいところだ。
無理をしてバイトを残りの1日に入れると、見事に休みが無くなる
のである！

この間、その事を平志に愚痴ると、散々褒めているのか貶しているのか分からない罵倒を言うだけ言って去って行った。

そんなこんなで予定では先週には終わっていた宿題をまだやっているのだが、今日は久々に珠胡とも柴奈乃とも会う約束は無いし、バイトの予定も入っていない。

折角の休暇ー（夏休みなのに休暇…）なので今日はゆっくりしよう。そう思って自室を後にし、気分転換も兼ねて町へと繰り出す。

昼食は安さに負けてどんぶりを掻き込んで済ませ、何ともなしにぶらぶらと散歩コースを歩く。

ここ最近の騒がしさを思いだしながら、静かな午後を楽しむ。

すこし日差しがキツイが、その暑さすら夏らしいと喜べる。
今自分は自由なのだ。

「あの…せん…はい？」

一人の自由を噛み締めていると、不意に肩をつつかれた。
何かと思い振り向くと、そこにはなぜか珠胡が居た。

恥ずかしそうに顔を赤らめながらも嬉しそうに笑っている。

「よかった。やっぱり翔悟先輩でしたか。」

「ど、どうしたの？ こんな所で。」

今翔悟と珠胡が居る所は商店街から離れ、主だったデートスポット

トと言える所からも外れた何も無い川沿いの土手道だ。

同じ地元の柴奈乃ならともかく、電車でこの近くの高校に通う珠胡が、こんな地元でも寂れた場所で合うとは意外だった。

「えっと、実はこの近くに親戚の伯父さんが居るんです。それで、忙しい母の頼みで伯父さんにこの包みを渡してきて欲しいと言われて…」

一気に捲^{まく}し立てる珠胡。しばらくして気付いたのだが、この娘の何かを説明する時の癖だ。最初は苦しいのではないかと気になったが、本人は息を切らせる様子は無いので大丈夫なのだろう。

「へえ、じゃあ偶然か…」

「そ、そうですね！」

良い返しが思い付かなかったので適当に相槌を打ったのだが、意外と嬉しそうに頷く珠胡。

ここはやはり、曲がりなりにも彼氏の自分は伯父さんとやらの家まで着いて行つてあげるのが、せいぜいの紳士的な振る舞いだろう。

「俺も着いて行つて良い？」

「あ、え、あつ、はい！ どうぞっ！ とうかお願いしますっ」

こちらから提案したのをお願いしてしまった。

「じゃあ、伯父さん家つてどこかな？」

「あ、それが…」

そう言つと彼女は気まずそうにしました。

「どうしたの？」

「えつと…あの…私……」

やはりいきなり親戚の家まで一緒に行くのは図々しかったか？いや、でもさつき彼女もお願いしますと言っていたし、なんだ？

「あの……」

「いや、言い難いならいいよ。いきなり一緒に行こうなんて言つてごめんね。」

「いえつ、違うんですつ。あの…私、迷つてるんです…」

必死に否定したかたと思うと段々と声が小さくなっていき、最後の方は蚊の鳴くような声量しかなかった。

「えつと、迷つてるつて、俺と行く事に、かな？」

「いえ、伯父さんの家がどこか、わからないんです…」

「あ、ああ……」

「うう……」

それを聞き、その場で固まってしまった。
まさかこんなに困っているとは思わなかった。というかそんな事

で困っているとは予想外だ。

完全に気まずい空気に包まれた場を切り抜けようと、とにかく解決できそうな事を消化していく事にする。

「じゃあ、伯父さんの住所って分かる？」

「いえ、川沿いにある古い屋敷がそうだと母が言っていたんですけど…」

知ってたら迷っていないと自分に突っ込みながらも頷く。

またアバウトな説明だ。この娘とは違い、母親はいい加減な性格らしい。

「あの、先輩は分かりますか？」

そんなこと聞かれても、地元とはいえ知っている場所とそうで無い場所がある。

古い屋敷と言われても、この川沿いは割と手が加えられていないので有名だ。

古い家はいくらでもあるし、屋敷といっても少くない軒数が数えられる。

「うーん…」

手がかりになりそうなモノといったら他には名字ぐらいか。

「珠胡ちゃん、伯父さんの名前ってわかるよね？」

「はいっ、えっと、たしか下川という名字ですっ」

「よし、じゃあ大変だけど虱潰しに当たってみるしかない。」

「よ、よろしくお願いします。」

結局伯父さんの家を見付けられたのは、もうすぐ夕方になるつかという時刻だった。

名字が下川だから予想出来なかったわけでは無いが、まさか直線で5kmも川沿いを下る事になるとは思わなかった。

包みを渡す時に伯父さんにお茶に誘われたが、珠胡は帰りが遅くなるからと断っていた。

家を出る時に彼氏さんと伯父さんに聞かれたので、はい。と応えたのだが、珠胡が恥ずかしそうに急かすのでまともに自己紹介は出来なかった。

「今日は本当にありがとうございましたっ」

耳を真っ赤にしながら礼儀正しく頭を下げる彼女が、なんだか可愛くてつい頬が緩んでしまう。

「いって。だいたい、俺から着いてくって言い出したんだし。」

「でもワタシの所為でこんなに時間を使わせてしまうなんて…」

「気にし過ぎだって。それにどうせ何も無くて暇だったんだし、丁

度いい暇つぶしになったよ。」

そもそもその“暇”とやらを楽しんでいた事は彼女には黙っておくとして。本心半分気遣い半分に翔悟は頭を掻く。

「あの、今度何かお礼をさせてください。」

「お礼って、そんな畏^{かしこ}まらなくてもいいんじゃない——」

「今度先輩にお料理ご馳走しますっ！」

ぐっ、と両手を握って言い放たれた。なぜこんなにヤル気なんだろうか。

「じゃあ楽しみにしてるよ。」

折角の申し出なので受けておく。それに、彼女の手料理が食べられるなら彼氏冥利に尽きるというものじゃないだろうか。

「は？ は、はいっ」

今何か疑問符が付いたような気がするが、そこは気にしない事にした。

珠胡を駅まで送ってから自分の家へ帰る。

商店街のウマイ揚げ物屋で特製チクワ揚げでも買って帰ろうと思って歩いていると、前方で見知った女の子が買い物袋を腕から下げて店頭のお買い得品と睨めっこしていた。

「よう。」

「ん？ あ、翔ちゃ〜ん。」

呼ばれてこちらを向いた少女は翔悟の幼馴染であり、現在二股の関係になってしまった彼女、栗崎^{くりざき} 柴奈乃^{しなの}だった。

「どうしたの？ こんな所歩いてるなんて珍しいねえ。」

「いや、お前こそ何やってんだ？」

そう言つと、柴奈乃は今見ていた商品と翔悟の顔を交互に見てから、これが欲しいがお金が足りないのだと言つた。
見るとそれは在庫処分で半額以下になったかき氷機だった。別段特別なデザインでもなく、普通にそこら辺にある品だ。

「これ、欲しいのか？」

「うん。折角の夏なんだからかき氷食べたいよねえ。」

「えつと…」

なんかこのタイミングでそんな事言われると、色々ツツコミたくなってしまうのだが、かといって商店街のど真ん中で漫才するのは避けたい。

ここはぐつと堪える事にする。それに。

「はあ…」

切ない表情で欲しそうにかき氷機を見つめる柴奈乃を見ると、つい買つてやつても良いかと思う。

「じゃあ俺が買ってやるよ。」

「え、本当っ?」

「これくらいなら出してやる。」

「ありがとうー!」

嬉しそうに感謝されて照れくさかったので、さっさとレジへ持って行き会計を済ませる。

「俺が持つてってやるよ。」

「そんな〜」

そんな残念がらなくても良いと思う。

「じゃ〜、ほれ。」

かき氷機の箱を渡して買い物袋をひょいと奪い取る。

「あっ」

「これでお相子だ。」

「翔ちゃんの照れ屋さん……」

「どうも。」

くすぐったそうに笑いながら隣を歩く柴奈乃。
そんな彼女の横顔も良いものだと思いながら二人で歩く。

いつものY字路に着く。今日はいつもと違い柴奈乃の家の方へ行く。

どうせなので彼女の家まで荷物持ちを志願した。

「ごめんねえ、こんな事させてえ」

「いいよ。俺がしたかったんだから。」

二人で静かな住宅地の道路を歩く。
なんとも静かな時間だった。

「ねえ、翔ちゃん。」

「ん？」

「なんでもない。ふふ」

コロコロと笑う

「なんだよ。」

嬉しそうに笑うから、何か分からず問い詰める。

「なんでもな〜い」

結局なんなのか理由を聞けずに彼女の家に着いてしまった。
いつも別れる時に言うようにバイバイと言って別れる。

家に帰って自室のベッドに横になる。

結局完全に休めたとは言えないが、今日は良い一日だったと思い返す。振り回されたというか自分で首を突っ込んだ一日だった。

ふと、いつまでこんな関係を続けるつもりなのか自分を責めた。

あんなに一途な二人を自分の都合で縛っておくなんて、とてもじゃないが他人ならば許せないような行いだ。そんな事をやってヘラヘラしている自分を思い切り殴ってやりたくなる。

（だけど俺にはどうすればいいか分かんねえよ）

一人でモヤモヤと悩んでいると、なんだか眠気までどこかへ去ってしまった。

まだ寝るような時間では無いし、仕方ないのでリビングに降りて行きテレビを点けて、冷蔵庫から麦茶を出して飲む。

画面には最近起きた事件や芸能人の恋愛ニュース、世界情勢や株の傾向など、多様なニュースがひっきりなしに流れてた。

画面を眺めながら前触れもなく思いたず。

およそ半年前に起きた怪事件。突如流れた謎のメッセージと映像。あまりにも突然で、そして一瞬だった。

当初こそ世間を騒がせる燃料になり、今でも少くない謎のメッセージ関係の事件が起きているが、現在では飽きやすい国民性のせ

いか、それも一種の都市伝説と化しつつあった。

今では数多のメディア情報に埋もれ、ちょっとした悪戯程度の扱いだった。

誰もが知っているが、誰も気にしてない。

その事を考えると背筋が寒くなる感覚が奔る。

メディアやネットの情報によれば、世界規模、つまり地球規模で起きた現象なのに、未だに何も起きていない。

それが逆に薄ら寒い何かを予感させて、翔悟は怖くなった。

（別に何も起きてないしこんな事考えても仕方ないか）

コップを水盤に入れテレビを消そうとした。瞬間。

プツ、ザーーーーーー

「コンばんワ皆さん。カウントダウンをはじめます。今日のカウントハ“10”です。」

機械的な音声が、決して遅くない速さで読みあげられる。

砂嵐を背景に文体の違う文字が並ぶ。一文字ずつ色を変えてあり、大きさも角度も違う。

酷く歪な謎のメッセージが、再び世界に発せられた瞬間だった。

? Side Story・平志：オレの考え

オレの名前は桑原 くわはら 平志 へいじ、現在17歳でアッチの経験はまだ無い。
彼女絶賛募集中だ。

オレ考えるに、この世には持てる者と持たざる者が居る。
言い換えるなら、モテる奴とモテない奴が居る事になる！！

非常に悔しい事だが、オレ自身はどちらかと言つなら持たざる者、
つまりモテない奴だ。

それは高校に入った時に思い知る事になる。

羽山 はなやま 翔悟 しょうごと出会ったのは皇高校 すうこう入学の初日。

最初の自己紹介というやつで知った。

初めの印象はパツとしない目立たない男子という、あまり好印象
でもなかった。

しかし、オレの自論では学校で一番大事なのは最初のツカミであ
ると考えている。

今後三年間の学生生活の大まかな方針を決めるのは、まず間違い
無くこの自己紹介だ。

ここで得た印象を元に日常生活のポジションが決定され、以降の
話してみてのイメージ修正はさして大きく動かせないだろう。

そんなこんなでパツとしない奴で始まった羽宮 翔悟とは4月中
は全く話さなかった。

あいつと話すキツカケは5月の中頃。来月の体育祭に向けた練習

でだった。

この学校では新入生や新学年の団結を強めるために早い時期に体育祭をやるみたいだ。

羽宮 翔悟は別段勉強が出来るわけでも運動が得意なわけでもない、逆に特別不得手なわけでもなく、ムードメーカーを買って出るような事も無い。

本当に目立たない奴で、オレとしてはあまり好きじゃなかった。

その日は男子女子別の種目練習で、男子の組は騎馬戦の練習だった。

入部期間に入ってすぐにバスケット部へ入部したオレは、クラスでは割と運動神経の良い方だという評価をされていたらしく、自分でもそれなりの自負はあったので、あっさりと上で相手と取っ組む役になった。

その時の組で組んだ内の中に羽宮 翔悟が居た。こんな奴と一緒に大丈夫かと思ったが、オレが思う程の運動音痴でもなかったらしい。

騎馬は前に一人、後ろの左右に一人ずつで騎馬を組み、その上に相手の帽子を取る役目が乗る形だった。

最初慣れないオレは右に左にとバランスが安定せず、何度か危ない事もあった。

しかし、練習で模擬戦をやっている時、右に踏み込むのに合わせて絶妙な加減でアシストされ、思わず羽宮の顔を見てしまった。羽宮は俺を見ずに、「前来てるぞっ」と言っていると、何事もなく続けた。

結果としてはその日の勝率は5戦4勝となかなかのものだった。授業の終りに俺は羽宮に声を掛けた。

「よう、なかなかよかったぜ！ナイスアシストだった！」

「おう。どうも。」

その時はまだ、あんまり良い奴とは思わなかった。

体育祭の当日。

本番の雰囲気でも興奮していたオレは、騎馬戦の番が来ると大はしやぎで勝つぞーと、みんなを鼓舞して舞い上がった。

結果、周りを見れていなかったオレは左から伸びて来た相手の腕に驚いてバランスを崩し転倒。

帽子を取られるまでもなく、初戦敗退となってしまった。

この時のオレは張り切っていた反動もあり負けた悔しさと、土台を支えてくれていた奴等に申し訳なくて結構落ち込んでいた。

他の奴等も同じようで、あまりの呆気無さに少し暗い雰囲気になっていた。

このままじゃ悪いと思い、謝ろうと口を開こうとした瞬間。羽宮翔悟が先に言葉を発していた。

「すまん、俺がバランス崩しちまった所為で…」

その時の俺がどういう顔をしていたか、後から聞いた話ではまぬけ過ぎて笑うのを堪えるのが大変だったらしい。いつか見返してやる！！

とにかくその時は、他の奴らもしょうがなかったと諦めて、後半の綱引きでは三年とも良い勝負をするほどのヤル気を見せた。

残念ながら上位入賞は出来なかったが、三年と互角に近い戦いが

できたので、みんなは一応の満足感を得る事が出来て、体育祭は終わった。

しかし、俺はずっとあの一言が気になっていた。なぜあいつは話した事すらない俺を庇ったのか。

別に助けられた事が気に入らないのではなく、単純に気になっただけだった。…んだと思う。

閉会式が終わった後、解散になり思い思いの友人と帰る生徒の中で、あいつを見つけた。

誰かを待っているようで、一人でグラウンドの入り口で立っている所へ声を掛ける。

「よっ、おつかれさーん」

「お疲れえ。」

さり気無く羽宮の隣に立つ。

羽宮は何かという顔で俺を見てくる。

「今日はおつかれさん。」

「今同じ事言っただろ。」

「いや、実は違う事聞きたくてさ。」

「？」

割と明るいキャラで通るオレがいつに無く真面目な顔をするのを見て、あいつは明らかに不審顔になった。

「騎馬戦で負けた後、なんで俺の事庇ったんだよ？」

クラスの友人が通り過ぎ様に挨拶してきたのでそれを返す。
相変わらず羽宮は素っ気なかった。

「別に。特に理由は無いな。」

その時の俺は、負けた悔しさよりも、気に入らない奴に庇われた屈辱感でいっぱいだった。

「どうせ俺に恩でも着せて後からなんか言うつもりなんだろう。」

羽宮はそんな意地悪な俺の発言をさらっと流して言う。

「考えすぎだろ。右側に倒れたんなら、右側の俺が支えきれなかった所為だ。」

「ああ、そうだな。で、俺に何をして欲しんだ？ 昼飯でも奢らせてもらえるのかっ？」

もう頭に血が上って今にも殴りそうな俺は、かなり挑発的な発言をしてた。

本当は理由を聞くだけで、感謝もするつもりだったのだが、オレは昔から興奮すると周りが見れなくなる癖があった。

横眼で睨みつけるオレに困ったようにあいつは言った。

「あのなあ、別に気にしなくてもいいだろう。」

「何がっ」

「俺達は同じ組の仲間だ。仲間内で誰が悪いだのって言うの、おかしいだろ？」

驚いた。オレはこいつの事をたまたま組む事になった、ただのクラスメートだと思ってたのに、こいつはオレの事を仲間だと思ってた。

その言葉を聞いた瞬間、自分が如何にこいつを勘違いして捉えていたかを知らされた。

こういうパツとしない奴というのは、どうせ影で誰かの悪口を言ってるような奴が大半なんだと思ってたからだ。
とんだ思い違いをしていたオレは、思わず羽宮から逃げてしまった。

「ん？じゃあな」

「くっ！」

恥ずかしくて顔を合わせられない。

自宅に帰ったオレは四畳半の自室に寝転がって考えた。

あいつは、羽宮 翔悟はオレの事を仲間だと言ってくれた。だがオレはずっと根暗な奴みたいな目で見ていた。

たまたまとは言え同じ騎馬になっただけで、自分へ対し少なくな
い嫌悪感を抱く人間に仲間なんだと言って庇ってくれた。

あまりにも自分がカッコ悪く感じ、自分の考えを改める事にした。

見かけで人を判断しない。オレはその言葉の意味を本当の意味で解った気がした。

翌日。オレは教室に入って主だったクラスメートと挨拶する。だが今日から、この主だったクラスメートに一人追加する事にした。

「よう羽宮くおはようっす」

「ん？ああ、おはよう？」

「なんだなんだあ？ 朝からテンション上げてけよ」

何かなんだか分からないという風の羽宮を押しきる。

こうでもしなければ昨日の自分が恥ずかしくて穴を掘ってしまいそうだった。

「いや、なんだ。お前と俺ってそんな仲良かったか？」

「連れない事言っなって！ 今日からオレとお前は親友だ！」

「はあ？」

「オレ桑原^{くわはら}平志^{へいじ}。よろしくな。」

「いや、知ってるけど。」

「なんだよー！ だったら言わせんなよっ」

ズバッと羽宮の腕にツッコミを入れる。

しばらく何もしなかった羽宮は、おもむろにオレの手をどかして言った。

「羽宮だ。よろしく。」

「よろしくなっ」

お互いの手を握って握手する。

オレはその時、数少ない本当に友達と言える存在が一人増えた気がした。

オレは友達は裏切らない。

“友達と一緒に遊ぶ奴の事じゃない、友達とはそいつの事を信じられる奴の事を言うんだ。”

親父が、オレが小さい頃に教えてくれた言葉だ。

だからオレは、心の底から友達だと胸を張れる奴は絶対に裏切らない事になっている。

「よろしくなっ、親友！」

「ランクが上がるのが早過ぎだろっ」

「小さい事は気にすんな！」

なんだか嬉しくて、嫌がる羽宮と肩を組む。

「翔ちゃんどうしたの〜？」

羽宮とじゃれていると水面下で確実なファン層築く女子、栗崎くつはき
しなの

柴奈乃が話しかけてきた。

噂では羽宮とデキているらしいが、俺は夢を見たい。

「ああ柴奈乃。こいつをどかしてくれ。」

オレの顔を離そうとぐいぐい押しながら羽宮が言った。いや、っていうか、名前だとおお！？

「駄目だよお桑原くんっ」

「栗崎さん、これは男の友情なんだぜ！」

そうだ！これは友情だ！

「なんだ〜。翔ちゃんそれ先に言ってよお」

「ちっがーっ！」

思い切り断言するが、言う程嫌そうにも見えない辺り、こいつは良い奴なんだろう。

その時何を思ったのか、こうなったらこの場の勢いで前から気になつていた事を聞こうと思いついた。

「ところで栗崎さんって羽宮といつも一緒に居るけど付き合ってるの？」

「なっ、おまつ、何言ってるんだっ」

いつも素気ない態度をとっている羽宮が焦り出した。シャイな奴め。

「違うよ。私と翔ちゃんは幼馴染なんだよ」

「えっ。付き合っていないのにいつも一緒にイチャイチャしてんの？」

「イチャイチャなんかしてねえ」

まさかそんな事が本当に許されるとても！？

「もう、桑原くん勘違いは良くないよ」

「オーマイガッ！」

嘘だろ？スポーツができて、見た目も悪くないオレに彼女が出来ないってのに、パツとしないこいつにはなんとつ、なんと！男ならば一度は夢見る可愛い幼馴染だとおおおお！しかも毎日イチャイチャしてるなんてえええええ！う羨まし過ぎるううううう！！

「おい、心の声が全部口から出てるぞ。」

「うおおんっ」

別に他愛もないオレの悪くない思い出の一つだ。

? Side Story・柴奈乃：変るセカイ

再びあの謎のメッセージが世界へ発信されたのは8月29日の月曜日だった。

時刻は大体、日本時間で夕方5時50分くらいだったらしい。らしいというのは、私はそのメッセージを見る事も聞く事も逃してしまっただからだ。

そのメッセージが流れてからというもの、テレビのニュース関係は謎のメッセージ関連で埋め尽くされた。

翔ちゃんの話ではインターネットも同じような状態だと言っていた。

毎日のように流れてくる先進国のミサイル施設が占拠されたとか、核兵器の所在が分からなくなっているとか、難しい事ばかりで私はうんざりしていた。

「もうっ、また同じニュースだあ。どうなってるのかなあ？」

さいばし
菜箸を片手に愚痴る。

今日は9月19日の月曜日。学校は祝日でお休みだ。

あれからというもの、毎日同じような内容のニュースが続き、好きなテレビ番組もいくつか中止され、正直な所本当に嫌だった。

「しょうが無いじゃない。マスコミっていつのはこういうのが好きなのよ。」

思わず愚痴ってしまった私に向かってお母さんはそう言うと、手

元のお茶を啜る。

そんなのは分かっているが、こればかりは文句の一つも出てしまふ。

確かに今、世界中で恐ろしい事が起きているのは分かるけど、楽しみを潰されて喜ぶ人は居ないだろう。

「でも」

「それより柴奈乃、あんたやる事あるんじゃないの？」

反論しようとしたら、先程まで進めていた作業を促された。^{うなが}

すっかり忘れてしまっていたが、今日はこれから幼馴染の翔ちゃんと、後輩でライバルなタマちゃんがウチに食事をしに来る予定なのだ。

「あつ、忘れてたっ。えっつとー」

「本当にお母さん手伝わなくて大丈夫？」

さつきから事あるごとに意地の悪い顔をしながら聞いてくる。簡単なおもてなしくらい私だって出来るのだっ。

「大丈夫だよお！」

「あら、そう。」

今日は、夏休みの終りにかき氷機を買って貰ってしまったので、そのお返しに手料理をご馳走するのだ。

最初は翔ちゃんに自分の手料理を食べてもらう口実を探していたのとそれにかき氷機の借りが重なって出来た機会なのだが、このチ

ヤンスを逃したくなかったのも事実だ。

誤算といえばタマちゃんが来る事になった事か。
学校の昼休みにタマちゃんが居る場で話題が出、彼女も来たいと言ってきたので了承した。

嫌な訳ではないんだけど、タマちゃんが来るのなら下手な料理は出せない理由ができる。

同じ人を好きになったライバルとして、先輩として、何よりも女としてである。

よく、のほほんとしてると言われるが、私もやる時はやるのだ！

と、言う訳で、今回のメニューは肉じゃがと野菜のスープだ。

二品じゃ寂しいので、お母さん直伝じきでんの玉子焼きも付けよう。

メニューが素朴なのは気のせいだ。

別に料理のレパートリーが少ない訳では無いし、ましてや料理自体がそんなに上手くない訳でも無い。

決して、断じて、きつと……。

そ、それに家庭的な面をさり気なくアピールするには、こういった簡単でいて作り手次第で美味しさに影響する料理が打ってつけなのだ！と、料理番組でコメンテーターが言っていたような気がする。

「よしっ」

早速昨日買ってきておいた食材に手を付ける。

昼過ぎに来说うていたのでまだ時間はあるだろう。

テレビでは朝のニュースバラエティがCMに入る処だった。

不意に玄関のチャイムが鳴ったのは、柴奈乃がスープの味付けを見ていた時だった。

時計を見やると短針はもう右に傾いていた。

「はい」

急いで出口に迎えに行く。

ドアを開けると、入り口には翔悟と珠胡シヨウウちゃんタマちゃんがそこに居た。

「よっ、来たぞー」

「あの、お邪魔しますっ。」

いつもの様に気楽な翔ちゃんと、なんだか畏まった感じのタマちゃん。

二人を招き入れつつ自分は仕上げに取り掛かる。

「ごめんね。そこに座ってもうちよっとなんとか待っててね。」

ダイニングテーブルのイスを勧めながら言う。

「はいよー。あっ」

「あら、こんにちわー。久しぶりねー」

「こんにちわおばさん。今日はお邪魔します。」

「そんな畏まらなくていいわよ。ゆっくりして行ってねー」

「はい。」

「そちらの可愛いお嬢さんは？」

「あ、えと、一井^{いちい たまこ} 珠胡^{たまこ}といいますつ。今日は柴奈乃先輩にご馳走していただく事になって、大変光栄で……」

「やだもつ。そんな大層な物、あの子は作れないから安心して」

何が可笑しいのか笑いながら話すお母さんに軽く憤慨しつつ、せつせと仕上げの作業を続ける。

味付けはこれくらいでいいかな？

「じゃあお母さん、ちょっと出かけてくるわね。あんまり羽目を外しちゃだめよ」

「もっつ、いってらっしゃい！」

「いってきまゝす」

そう言つとさつさと出ていってしまった。
まったく、とんでもないお母さんだ。

「ごめんねえ。もっすぐ出来るから。」

なんだか恥ずかしくなって謝る。

「ははっ。相変わらず楽しいお母さんだな。」

「そ、そうですね。」

まあ翔ちゃんとタマちゃんがそう言うなら悪くはなかったのだろ
う。

個人的に後でお母さんに言う事はあるが。

そうこう言っているうちに盛り付けが整った。

今回渾身の出来の肉じゃがを器に分け、スープは大きめの深皿に
盛り、卵焼きは長方形のお皿に切って載せる。

お盆でテーブルまで持って行き、それぞれの前に並べていく。

「おお美味そう。」

「ふわあ〜」

「そんなに美味しくないかもしれないけど、どうぞ召し上がれ。」

美味しいと言ってもらえるかという不安と、気に入って貰えるか
という期待で、ソワソワしながら二人に勧める。

「じゃ。いただきます。」

「栗崎先輩、いただきます。」

「どうぞ〜」

世界が大変なのに、今こうして好きな人達と何も変わらない日々

を過ごせている自分は、本当は凄く幸せなのかもしれない。
いや、何も変わらないままでは駄目なのかも。

こんな中途半端な関係がいつまでも続くはずは無い。

ならば自分はいつか決めなければいけない日がくるかもしれない。
その日がいつになるかは判らない。けれど、その時は自分の気持ちに素直になろうと、柴奈乃は心のどこか片隅で思った。

目の前で美味しいと絶賛してくれている翔悟シヨウウちゃんを見ながら、目を真ん丸にして喜びながらどこか悔しそうにしている珠胡タマちゃんにどこか罪悪感にも似たモノを感じながら決心する。

「それにしても、この卵焼き美味しいなあ。」

「ワタシ、こんなにお料理上手くないです。栗崎先輩凄いですっ。」

「うん、二人ともまだいっぱいあるから、どんどん食べてね。」

「おう」

「はいっ」

でも、今はこれでいいんだ。と、柴奈乃は心の底から笑顔になった。

オワリの始まり：Count？

夏休みの終りの週、あの日の宣告で、止まっていた何かが動き出した。そんな気がした。

2月に流された最初の謎のメッセージの後、一時的に急増した犯罪や事件は、結局何も起きない日常に飽きてしまったかのように日々減少傾向にあった。

しかし、あれから約6ヶ月後のあの日、再び流れた謎のメッセージにより世界はまた混沌としだした。

息を潜めていた宗教紛いの暴力集団が毎日のようにテレビを騒がせ、世界各地の情報のほとんどは兵器貯蔵施設の占拠やテロ組織の活発化など、目を覆いたくなるラインナップだ。

趣味のネットサーフィンをしても、どこのサイトも必ずと言っていい程にこの話題が付いて回った。

だが、メディアやネットがこんなに騒いでいるのに、翔悟の日常は全くと言っていい程平和だった。

近所では強盗事件なんか一切起きないし、突然行方を晦ます人も出てこない。

自分の周りではなんの変化も無いし、当の自分もなんら危機感という物を感じていなかった。

こうやって振り返る度に思うのだが、あれはマスコミのよく分からない戦略的な情報操作で、実は世界は前と然程も変っていないのではないか？

別にあのメッセージが送られる前にだって、世界各地では紛争が絶えまなく続いていたし、事件は毎日のように起きていたはずだ。今でもどこかで大勢の人間が亡くなり、それ以上の人間が産まれている。

そんな途方もないサイクルの中で、一介の高校生である自分が一体何を心配するのだろう？

なんだか思考の枠が広がってきたのでうやむやにして止める^や。

時計を見る。今の時刻は午前10時25分。3時限目の授業が始まったばかりだ。

黒板には難しい古語が書かれ、それに振り仮名を振りながら現国の教員が解説している。

とりあえずノートに書き写して、教員の話しは適当に聞いておく。

平和だ。

世界中が混乱の渦に巻き込まれているなんて露^{つゆ}にも思えない。

夏も終わりが近く、吹く風は少し冷たさを感じる9月の下旬。

校庭では体育の授業で生徒が外周を走っている。中にはもうジャージを来ている生徒も見える。

「じゃあ、ここ。教科書の98ページ。川内読んでみる」

「はい」

いつもと変わらない授業風景。

教員にばれないように欠伸をする。

ぼーっとしていたらあっという間に昼休みが来てしまった。

4時限目の内容が全く頭に残っておらず少し焦ったが、ノートは一応録っていたらしい。

見覚えのない記号と図解がなんともだらしないうでで書かれていた。

「翔ちゃんっ」

「ん？」

「じゃーん♪ お弁当作って来たよー」

「おおー。俺に？」

「うん！ 一緒に食べよう」

「おう」

柴奈乃と机を挟んで座り、彼女の作って来た弁当を開ける。

中にはタコ一（カニ？）さんウィンナーや、この前絶賛した卵焼きや、プチトマトやらが飾られていた。

「結構手が込んでるな」

「えへーん。頑張ったんだよお」

「へえ」

両手を腰に当てて胸を張る彼女は、親に褒めて貰いたそうな子供の様で可笑しかった。

「じゃあいただ——」

「よう、お二人さん！」

突然後ろから肩を思い切り叩かれた。

犯人は大方予想が付く。

「やつほー 桑原くん」

一応確認しておこうと思ったが、振り返る前に柴奈乃が犯人の名前を言いながら挨拶する。

予想通りだったので振り返るのは中止。

「なんだなんだ？ 昼からイチヤイチヤしちゃってこのっ」

ウインクをバチバチしながら肘で小突いてくる平志。

ゆっくり食事をしたいのだが、とりあえず要件だけでも聞いておこう。

「で、なんだ？ 何か用か？」

「はうう！ なんか冷たくね！？ あれか、ラブラブタイムを邪魔した俺の事をそんなに恨んでいるのかっ！」

「当らずとも遠からずだな。で、何かあったのか？」

「遠くないのかよー。まあいいや。お前に用がある娘が来てるぜ」

そう言っただけ平志は親指でぐいっと入り口を指す。

そこにはもう一人の彼女、一井 珠胡が立っていた。

目が会うなり会釈する辺り気弱というか謙虚な女の子だ。

「柴奈乃、屋上行くか」

「うん、いいよあ」

いくら知り合いだからといっても上級生の教室は居心地は良くないだろう。

珠胡の事を気遣い、屋上へ移る事にした。

お弁当を作ってきて貰った手前、柴奈乃を置いていくのも憚^{はば}られるので彼女も誘う。

「ちくしょー！俺も昼休みに女子とイチャイチャしたいぜ！」

「来るか？」

「いいのか！？」

「別に問題は無くも無い」

「よっしゃー！じゃあ行こうぜ！」

そう言っただけ平志は拳を思い切り突き上げ、購買部で買ったパンとコーヒーを持って屋上へ走って行ってしまった。

「おまたせ。珠胡ちゃん」

「あの、お邪魔じゃなかったですか？」

「あゝ。全然大丈夫だったよ。なあ、柴奈乃？」

「うん。私の事は気にしないで」

柴奈乃と二人で笑って返す。

二人の笑顔を見て安心したのか本題とばかりに珠胡は手元の包みを差し出す。

「これ、ワタシが作ったお弁当ですつ。よかつたら食べてみてください」

「とりあえずここじゃ、さ。屋上行こうか」

「え？ あ、はいっ」

最初キョトンとした珠胡はここがどこだか思いだしたようで、急に顔を赤らめて俯いてしまった。

こうなると色々と面倒なので手を引いて屋上へ向かう。

柴奈乃は「翔ちゃんはやっぱ優しいねえ」なんて他人事だから笑えない。

「はあ。平志が待ちくたびれてるぞ。ほら」

言っている傍から屋上に続く階段を噂の当人が降りて来ていた。

「おおーい！ 待ちくたびれたぜー」

「今そつち行ってるから戻れ」

「相変わらずお前って奴は失礼だなー」

「ごめんねえ、翔ちゃんだから許してあげて桑原くん」

なんだかいつの間にかそのやりとりがテンプレートになってませんか。

心の中で二人にツツコミつつ珠胡の手を引きながら階段を上っていく。

その日の昼食は結局、珠胡まで弁当を作ってきたのでみんなでオカズを少しつつ筒摘まみながら食べた。

終りには二人から感想を聞かれ、ほぼ二食分の弁当を食べ苦しい中を教室まで頑張った。

「ふう」

今は放課後をちよつと過ぎたくらいで、校庭や教室ではまだ生徒の楽しそうな声が聞こえてくる。

翔悟は保健室で少し休ませてほしいと保険医に言い、部屋の隅に置かれたやけに座り心地の良いソファに座っていた。

「まったく。保健室は休憩所ではないんだぞ」

昼食を食べすぎたせいか気分が悪くなったので、翔悟はHRが終わると直ぐに保健室へと向かった。
ホームルーム

最初、腹が苦しいので休ませてほしいと言うと、やたら心配そうなの保健医はベッドに寝ているように言ってきたのだが、恐らくただの食べ過ぎだと自分が言っていると、手の平を返すように態度が変わった。

明らかに興味を失ったような冷たい目で「帰れ」と一言云い捨てると、自分のデスクへ戻って行き無言になってしまった。

噂は本当らしく、病人には天使の如く、健康な人間には悪魔の如き態度を執る人だ。

翔悟が聞いた噂とは、この学校の保健医は美人で綺麗だが、病人以外にはまるでゴミを相手にするような態度をとる。と、いうような内容だ

「そんな事言わずに、生徒を助けるのが先生の役目ですよね」

苦しいのは本当なので、軽い感じで答える。

「何をしれつと寝ぼけた事言うところんだお前は。私も暇ではない。用が済んだらさっさと帰る事」

「あ、あはは、すみません」

噂に違わぬ豹変ぶり。さっきまでの、まるで我が子を心配するような慈愛の眼差しは嘘のように消え去り、今や目を合わせる事無く黙々と書類にペンを走らせている。

顔は芸能人並みに綺麗で、スタイルも経験の浅い男子学生に見せるにはあまりにも威力の高いプロポーションだ。

長い黒髪をポニーテイルのように纏めた姿は凛々しく、まるで保健室の女神さまのよう。とかなんとか

平志が言っていたような気がする。

珠胡の告白を受けた際に世話になった事があるのだが、その時は用事があると言って珠胡を寝かせたらどこかへ行ってしまう、話す機会はなかった。

いつだったか平志が「あの先生は天使だ……俺、あの人のためならこの命を捧げられるう」とか言っていたのを思い出しながら、この性格じゃあモテはしても続きはしないだろうなあと考えてた。すると、何の前触れも無く保健医の方から話しかけてきた。

「そつえば君、ここに来るの初めてじゃないな？」

なんの事かと一瞬考えて、珠胡が倒れた時の事だと気付いた時には先生が話し始めていた。

「言っておくが私は独身だが彼氏は募集していないぞ」

「はい？」

「む、違ったか。まあいい」

突然何を言っているんだこの人は。

いくら二股状態の自分もそこまで見境がなくなっただけではない。向こうで勝手に察してくれたようだが、ここは一男としての名誉を守る為にも一言言っておかなければ。

「いくらなんでも先生程のお歳の方とお付き合いは考えてませんよ」
言ってから後悔する。

今まで顔を上げずらしなかった保健医が、明らかに心外だとばかりに目を見開いてこちらを見ている。

「ほほう……言っなあ……ここがどこだか分かって言っているのか？」

「いや、あの、そういう意味じゃ無くてっ、俺にはもう彼女という大事な女性^{ヒト}が二人も居る訳でして、その上先生までもといくわけにはいかない感じでして――」

折角手に入れた休憩所――（保健室のソファ）から追い出されては堪らない。今追いだされるのは避けたいので必死に弁解する。

「ふんっ、冗談だ。学生と恋愛なぞ考えるだけでも恐ろしいわ」

「で、ですよー」

よかった。どうやらこの保健医はそこまで鬼ではないようだ。保健医はあつ、と何かに気付いて意地悪く笑うと、こちらを向いて言ってきた。

「ふむ、いたいけな淑女の心を乱したのだ。願い事の一つでも聞いてもらおうか」

（いたいけな淑女って…）

ツツコムかどうか悩みながらも、非常に悪い予感がするがここは断れる処ではない。

とりあえずツツコムのは止めておき、嫌々ながらも先を促す。

「お前がなんで昼食を食べ過ぎるような真似をしたのか教えて貰おうか」

予想よりも全然普通だったので、逆に拍子抜けしてしまう。

「はあ……そんな事なら」

翔悟は二人の友人に弁当を作って貰い、断れないのでみんなに少し分けながらも、ほとんど自分で食べたと言明した。

「で、その作ってくれた二人には礼は言ったか？」

「なんとか言いましたよ。正直もう、一度に二人前は止^よしてほしいですけどね」

肩を竦ませて答える。

「ふふ。それで、その彼女たちはどうした？」

「喜んでましたよ。多分」

「そうかそうか、その二人とお前で二股ねえ」

「ええ、俺が不甲斐無いばかりに……って何言わせてんですかつ」

昼食の話がいつの間にか彼女らとの二股話しにすり替わっていたのに気付いて急いで文句を言う。が、時すでに遅く、保健医は話をそっちに持っていく事にしたらしい。

「そうだな。その年で人間関係の遊びをしているとは、いやはや末

恐ろしいヤツだな。お前は」

容赦なく人を女誑^{たら}しみたいに言ってくれる。

反論できないのがまた痛い処だったりするから泣けてくる。

「……俺どうしたらいいですかね？」

さんざん精神攻撃を喰らったせい、つい弱音が出てしまった。
どうせこの人の事だから、お前で考えろとか言っただろうなあと
思っていた。

「ふむ、そうさなあ」

「いや、いいです。先生には関係無いのにすいませんでした」

「ん。まあ、お前の好きにすればいいのではないか」

保健医は顎にペンのキャップを当てながら言う。
無難だ。恐ろしいくらいに。

「それができたら悩みませんよ」

溜息混じりに漏らす。

「そうだな。しかしお前には悩む必要があり、決めなければならない
責任がある」

「決めなければならない理由？」

突然何を言われたのか分からずオウム返しに言う。

そんな自分を見て保健医は面白そうに笑うと続ける。

「ふふ、昔な、知り合いにお前と同じようなダメ男が居たんだ。良い奴だがそれゆえ二人の女に振り回された愚かなヤツだったよ」

「は、はあ……」

保健医が唐突に語り出す。別に時間はあるし、そもそも相談を持ちかけたのは自分なので一応聞く。

「ヤツもその時私にこう言ったよ。『俺はどうすればいいんだ』とな。

私はその時ヤツにこう言ったんだ。『お前の好きにすればいい』と」

思い出しながら静かに語る彼女の表情はまるで、とても大切な物を遠くから眺めるようなそれだった。

漠然とだが、この話がこの保健医にとって大切な記憶なのだろうと察した。

「それで、その男性はどうしたんですか？」

彼女はつと黙り込んでしまったので、話しの続きを聞く。

「……その男は結局、どちらも選ばなかった」

「えっ」

「どちらの女も彼が選んだ方を祝福しようと決めていたし、その覚悟もしていたのにな。」

結局ヤツはどちらも選ばずに、そのまま三人は別々の路へ進み、もう会う事も無くなってしまったよ」

「……………」

言い終えると静かに溜息を吐いた彼女は、書類を引きだしに仕舞い鍵を掛けた。

くるりとこちらへ体ごと向けると足を組み直す。

「だからな、お前が本当にそいつらを大事だと思うなら、お前はどっちかを選んでやるべきだ」

「でも俺は二人とも本当に大切にっ！」

つい声を荒げてしまった翔悟に保健医は優しく言う。

「だからこそ、だよ。お前が悩むのは大事なことだ。悩んだ末の答えなら二人とも納得してくれるはずさ」

「そんな無責任な……」

「私は違うと思うな。解決できない問題を諦める事を無責任と云うのではない。問題から目を背けて逃げ出す事が無責任なのだと、私はそう思う」

「何が違うんですか」

「心さ」

「心、ですか？」

結局、片方を選べば片方は選ばれないわけで、どちらかが不幸になるのなら、いっそ選ばなければ平等だと考えた事もあった。

自分ではそんな無責任な事はしたくないので悩んでいたのだが、目の前に居る保健医はそれでもどちらかを選べと言っ。

「物事には決めなくても問題の無い物と、決めなければ取り返しのつかない物がある。

そして今、お前が悩んでいる事は、決めなければならない問題だ。決めて、初めて進展する問題なんだよ」

その言葉の真剣な説得力に翔悟は自然と考え込んでいた。

（決めなければいけない問題……）

「人生の先輩として一言教えといてやろう。人間関係においては即断即決が大事だぞ。覚えておくと良い」

「……はい」

保健室に運動部のけが人が来た処で話しは終った。

自分の中で二人の姿が浮かんでは消えていくような感覚を感じながら翔悟は保健室を後にした。

そういえば保健医の名前を聞くのを忘れていた事を思い出し、今度相談に乗って貰った礼を言う時にでも聞こうと思いつながら上履きと靴を履き替えた。

校門を出たところで思いもよらない相手に出くわし少し驚く。

「よっ！」

中指で眼鏡をくいと上げる動作をしながら反対の手を上げる。そこには同じクラスメートであり友人の桑原 平志が制服姿で立っていた。

翔悟の記憶が正しければ平志が入っているバスケ部は屋内練習中だ。つまりバスケ部員である平志はここに、ましてや制服姿で居る事は無いはずなのだ。

「この後暇か？」

「ん、ああ」

「おしつ、じゃあちよつと付き合えよ」

そう言われて付いていく。

「そついえば、お前と二人きりなんて久しぶりだな」

無言で歩いていると平志が言った。

考えてみればそつだ。今年の始めまでは二人で遊ぶ事も珍しくはなかったが、珠胡との交際をキツカケにめつきりその回数も減ってしまった。

「そつだな。で、今日はなんか用か？」

隣を歩く平志に聞く。

「いや、別に。ただ久しぶりにお前と思いつきり遊びてえな」って、な」

「それだけかつ」

「それだけだ！」

二人でゲームセンターへ入り、格闘ゲームの筐体で数戦し、13戦4勝9敗とボロボロにされた。

「今回は俺の勝ちだなっ」

「はいはい」

得意げな顔で平志は親指を立て、勝利の余韻に浸っていた。

いつもは五分五分の戦果だが、今回に限っては負けを認めざるを得ない結果だ。降参するように手を振りながら翔悟も笑う。

「今日は楽しかったぜ。んじゃまた明日な」

「おう。じゃあな」

大勝を収めたせいか上機嫌な平志は、駅の方へと走っていった。

その姿を眺めていると、途中で買いた物袋を下げた恰幅の良いオバチャンをすれすれで避けるという場面もあったが、あの調子ならまあ無事に帰れるだろうと翔悟も反対を向き自宅へと歩を進めた。

帰り道は住宅地を通るせいか、子供や主婦、早い帰宅を勝ち取ったサラリーマンの男性などが多く見かけられた。

時節十字路を横に通り過ぎる自転車に気を付けながら歩いていると、不意に携帯電話の着信音がポケットから鳴り響く。

着信画面を見ると、そこには栗崎 柴奈乃と書かれてある。
自然に笑みがこぼれるのにも気付かずに通話ボタンを押す。

「もしもし」

「あ、翔ちゃん？」

「どうした？」

「うん、あのね、実はタマちゃんに伝言を頼まれちゃってね。
ほら今日翔ちゃんすぐにどっか行っちゃったから」

「あ、ああ」

ホームルーム
HMが終わってすぐに保健室に逃げた一（昼休みに散々二人の相
手をしたので、正直一人になりたかった）ので、珠胡の用事を聞く
ことが出来なかったみたいだ。

「で、珠胡ちゃんは何だつて？」

「うん、翔ちゃんの好きなオカズは何かあったら教えてだつて」

「ああ……」

そういえば始終何か言いたげだったが、どうやら彼女は色々と質問があつたらしい。

その時は平志が完全に場のムードを掌握して弾丸トークをしていたせいで、押しの弱い珠胡は遠慮したのか聞けなかったのだろう。

好きなオカズを聞いてくると言う事は恐らく今後も作って来てく

れるのだろつ。

今後このような事が起きないように柴奈乃にお願いをしておく事にした。

「あのさ、柴奈乃」

「なあに？」

「出来れば二人とも別々に作って来てくれないか？ 流石に二人分いっぺんに食べるのはキツいんだが」

「おおー、流石の翔ちゃんも大変なんだねえ」

こつちは割と本気なのだが、柴奈乃は呑気に――（電話越しなので余計そう感じる）言う。

「まかせて、私とタマちゃんで相談しておくよ」

「すまん」

「はいはい。で、翔ちゃんってお弁当に何が入っていると嬉しいの？ 私も知りたいな」

「はは、お前もか。んー……ミートボール、とか？」

柴奈乃がくすりと笑う気配の後に呟く。

「変らないね」

「別にいいだろ。好きなものは好きなんだから」

「ん、分かった。じゃあタマちゃんにも教えておくね」

「ああ。用事はそれだけか？」

真夏に比べて日が短くなった空は、もう夕暮れを過ぎ辺りは紺色の闇に溶けていた。

電柱に取り付けられた電灯が道を照らし、それによって出来た影を野良猫だかが走っていく。

「うん、じゃあ……またね」

「ああ、また明日な」

そう言つと翔悟はゆっくりと通話を切る。

急に静かになったような道を一人で家まで歩くのだった。

家へ着いてみるとリビングでは母親がテレビのチャンネルをとつかえひつかえ見ながら興奮した様子で翔悟に話しかけてきた。

「あ、翔悟。おかえりっ」

「た、ただいま。なんかあった？」

いつもと違い楽しそうに話しかけてくる母親を訝^{いぶか}しむように見て尋ねる。

「それがね、とうとう私も見ちゃったのよ！ 噂の“謎のメッセー
ジ”！」

「おお！　また流れたんだ？」

どうやら帰ってくる間にまたあのメッセージが流れたらしい。
母親は興奮気味に説明する。

「なんだかいきなりテレビが映らなくなっちゃってね。そうしたら突然、変な声で“ 8デス”とか言って消えちゃったのよ。なんだったのかしらね？」

「 8……」

翔悟の記憶では夏休みの終りの放送では“ 10 ”という数字が映っていた。

つまりカウントは10から8に減っている。恐らく0で何かが起きるような知らせだろう。

これでまた変な団体が活気付かなければいいが、と思いながら自室への階段を上がっていく。

自分の部屋に入ると早速、部屋の隅にあるパソコンを点けると、起動するまでの間に簡単に着替えを済ませる。

ネットに接続し、よく利用する情報交換掲示板を覗くと、やはりその話題に関するページを見つけた。

内容をざっと見渡すと、どうやらおよそ一週間前に9のカウントがされたようだ。

結構な量の書き込みは少ない情報を持ち寄って、自らの推理を披露したり、出所の分からないような情報を元に今後の展開を予想する書き込みが多数だった。

テレビのニュースやバラエティでは、今回の“ 謎のメッセージ”

に関する事柄は意図的に避けられている節があるらしい事も書かれていた。

道理であり目にしない訳だと、翔悟は一人納得する。

翔悟の信用するサイトを数か所巡って分かった結果、どうやら予想以上に大変な事になっているらしい。

あくまでも噂で根っこまで信じる訳ではないのだが、一部の国では軍が秘密裏に出動する事態になっているようだ。

(……これはマジで大変なんじゃないか)

そう考えていると不意に携帯電話が鳴る。

こんな時間に掛けてくるなんて柴奈乃以外には無いので、そのつもりで電話に出る。

「よう、どうした？」

「あ、おい、羽宮か？」

声は男の物で聞き覚えがある。そう、さっきまで一緒にゲームセンターに居た奴だ。

「なんだ、平志か」

「なんだとはなんだ」

電話越しに笑う声が聞こえて翔悟もふつと笑う。

「で、何か用か？」

「“そうそう！ お前今日のアレ聞いたか？”」

「アレ？」

心当たりが無いわけではないが、期待を裏切られたという一方的な恨みを晴らすべく、少々意地悪な返答をする。

翔悟のとばけた声を聞いた平志は、呆れたような溜息をあからさまに聞こえるようにすると話し出した。

「アレって言ったら謎のメッセージに決まってるだろー」

「ああ、いや、俺自信は聞いてないな。母さんが見たって喜んでたけど」

さっきの母親の興奮した姿を思い出し苦笑いを浮かべる。

「俺の予想だけど、今年の終りに何か起きるんじゃないの？」

どうやら平志もそれなりに興奮しているらしい。
声が弾むように嬉しそうだ。

「何かねえ」

何か起きるとしたら、それは笑えない事かもしれない。

それは何も分かっていない今、友人である彼に言ったとしても不安を煽るだけなので言わない。

「何が起きるか分からんし、もう切る」

「おまつ！ それって切る理由になるの——」 プツ

最後何か言おうとしていたがとりあえず電話を切る。

少し休もうとベッドに寝転ぶと、放課後に保険医に言われた事を思い出す。

（もし何かあるとしたら、か——）

二人の顔を思い浮かべる。

どちらも大切な存在だ。簡単にこっちだと物みたいに選びとれるものではない。

（“お前が本当にそいつらを大事だと思うなら、お前はどっちかを選んでやるべきだ”）

保険医の言葉を思い出す。

「俺はどうすればいいんだよ……」

独りでそう零すと翔悟はいつの間にか意識を手放していた。

? Side Story・速水 美香：思い出

サッカー部の生徒が拵えてきた擦り傷を消毒し絆創膏を貼ってやると、なぜか嬉しそうに退室していった。

あの分ならば問題は無いだろう。息を一つ吐いて机に向かう。

書類に目を通し、必要事項を記入すると次の書類に目を通す。

なかなか消えない事務処理に少々うんざりしてきた。

ペンを置いて机の脇にあるカップを取って喉を潤す。

濃いブラックのコーヒーが疲れた頭を程よく刺激してくれる。

私の名前は速水 美香。年齢は秘密。スリーサイズも勿論秘密。
一昨年からこの学校、皇高校に赴任してきた保健婦だ。

前の学校でもそうだったが、高校生男児の女性に対する眼はどうもいやらしくて好かない。

そういえばヤツもそうだったな。

昔の知り合いを思い出して苦笑する。

どうやらさっきの少年の相手で記憶の紐が緩んでしまったらしい。私から見たら青臭い考えの甘ったれただが、どうにもほっとけない物をさっきの少年から感じた。

あの少年を見ると、まるで昔のヤツを見ているような気になってくるから面白い。

思わず似合わない真似をしてしまったが、まだ間に合うならば幸せになって欲しいと、つい助言してしまった。

（私はまだ、忘れてはいなかったんだな――）

昔の記憶に想いを馳せ^は、甘く切ない懐かしさに身を浸す。

今思うとどうにでもなっただろうに、あの時の愚かな少年少女達はどうすればいいのか分からず、結局は誰も望まない結末を迎えてしまった。

後悔はしていないが、思い出すと切ない気持ちに苛^{さい}まれる。

いつしか思い出す事も無くなっていた自分に今更気付き、自嘲の笑みを浮かべてカップの中身を一口飲む。

「若いとは……いいものだな」

何が可笑しいのか自分でも分からないのだが、自然と笑いたくなくなってしまう。

それがまた可笑しくて、一人でクスクスと笑う。

そういえば……。

先程の彼に名前を聞いていなかった事に気付く。

折角なので聞いておけばよかったと少し惜しい事をしてしまった。

どうせヤツと同じように間抜けな名前なのだろうな。

考えて、また可笑しくなってきたしまった。

思い出すだけでこんなに心が温まるのだ。あの時の事はきっと、自分にとって掛け替えのない思い出なのだろう。

寄せては引いていく懐かしさと、ほんの少しの切なさが、どうにも心地良くて思わず溜息を吐く。

「……さて」

気分転換も終わった。

残っている書類も片付けてしまおう。

保健の先生というのも決して暇ではないのだ。

夕暮れの朱に染まる保健室の隅で、彼女は書類との格闘を再開させた。

? Side Story・Mr Unknown:希望

「後もう少しだ」

男は画面越しに広がる世界地図を見て呟いた。

彼が見つめる画面上の地図は一見すると普通の物となんら変わらないが、詳しく見てみると奇妙な線が多数引かれていた。

ある線は都市から離れた荒野から、またある線は険しい山脈の頂きから、世界各国各地のあらゆる所から、これまたあらゆる場所に線は引かれていた。

その線は一樣に人が多く住むであろう都市圏内に向けられている。

男は手元のキーを一つ一つ叩くように打ち出した。

地図を開いていたブラウザが閉じられ、次に出てきたのは目眩がするほどの記号や数字の列。

それらは目まぐるしく変動しつつ、しかし何かしらの規則性を持つて流れていた。

足元に置いてあるミネラルウォーターを一口含み再び画面を凝視する。

右手の指を神経質そうに小刻みに震わせ、意を決したのか突然猛烈な勢いでキーを打ち出す。

左手でキーを打ちつつ右手でもう一つのデスクトップを起動させる。

真つ暗だった画面に明かりが点り、男の正面にある画面とは少し違う光景を映し出す。

それは一見すると同じ記号の列なのだが、男にとっては全く違う意味を持っていた。

「ふんつ。この程度で防衛なんて笑わせるね」

キーを打つペースを一切変えず、誰に聞かせるわけでも無く男は独り愚痴る。

もう少して自分の考えた世界が訪れる。
最初は馬鹿らしかった夢だったが、ある人物の協力で現実味を帯びてきた。

男には夢があった。希望と言い換えてもいいだろう。
人に聞かせるにはあまりにも馬鹿馬鹿しい青い夢だ。

彼がその話を初めてしたのは長い付き合いになる友人の一人だった。

とても良い奴で、男はその友人なら共感してくれると思って喋ったのだ。

すると友人は笑いながらこう言った。

「はっはっはっ、それは本気で言ってるのか？ よしてくれよ。俺だつてノれる冗談とノれない冗談があるよ」

その時の友人は決して自分を馬鹿にしていた訳では無いだろう。
しかし、信じていた友人に自分の真剣な夢を笑い飛ばされた事は、

彼にとってはとても強烈な不信感を抱かせた。

それからというもの、男は世界という見えない不条理に憤りつつも、何もできない自分の無力さを噛み締めながら、特技でもあるコンピュータをタネにフリーの技師をやっていた。

そんなある日。彼がいつものように趣味のハッカー作業をしていると、一通のメールが届いた。

そこには予想外の内容が記述されていた。

なんと、見ず知らずの相手から自分の夢に手を貸すというモノだった。

男はメールの主と直ぐに面会し、相手の情報の確かさと異常さをその場で確認した。

メールの主とあったその日から、もしかしたら世界を変えられるかもしれないのでは？ と淡くだが想い始めた。

つい去年の出来ごとだが、今でも鮮明に思い出せる。

男はついニヤけながらキー打つ。

つと不意に男の居る部屋のドアが開かれた。

念のためにドアが開いた時にセットしてあった電子音が部屋に静かに響き渡る。

男は作業を止めて振り返る。

そこには彼のよく知る人物が立っていた。

男はニヤリと笑うと、客人のもてなしもせずに話し出す。

「やあ。作業は順調だよ。あと十数か所抑えれば完璧だ。今日は何

か用かい？」

気さくに話しかける。

無礼とも言える客人にも彼が怒らないのは、相手が自分のパートナーだからだ。

そう、ある日のメールの主である。

本名はお互い教えない事になっているが、今回の作業が無事に終わった暁には名前を教えて貰おうと男は思っていた。

勿論自分の名前も教えて、だ。

男は自分の少ない持ち物からお礼なぞしきれないくらいの恩を目の前の相手には感じていた。

「……………」

いつまでも黙っている相手に不安になる。

もしかしてコーヒーの一杯でも出すべきだったか？ と流石の男も少し心配になってきた。

「これはすまなかった。今コーヒーを出すよ。そこらにテキストに座っててくれ」

乱雑に散らかされた部屋の、やっと一人一人が座れる程度のスペースを勧める。

「いや、その必要は無い」

相手が静かに言う。

「そうかい？　じゃあ今日は――」

振り返った瞬間――

“バスッ”

聞き慣れない音が相手の方から聞こえる。

直後に胸の辺りに棒で思い切り突かれたような衝撃が奔った。

何が起こったのか分からず男は相手を見た。

その手元には黒く硬質な光をたたえる円筒状の小さな物が目に入る。

男は今見た物が信じられなく、しかし頭のどこかでは分かっていたのか、自然と自分の胸部を触りながら顔を俯かせて衝撃が奔った部分を見ている。

手にはレアステークから滴るよりも更に赤い、毒々しいまでに赤黒い血がベツトリと付いていた。

胸を見ると、案の定そこも真っ赤だった。

思考が現実を追いついてきたせいか、息が苦しくなってきた。

周りの本の山や機械部品の塊を崩しながら倒れる。

今更ながら理解出来ない男は、たった今自分を撃った相手を凝視しながら問う。

「ど……どうして……？　ゲホッ」

息が苦しくて咳込む。

彼の問を聞いた相手は静かに答えた。

「今まで御苦労様。後はまかせて」

「ははっ……僕はずっと……君に……利用され……て……」

男は最後まで言い切る事なく息をしなくなる。

彼は絶望に揺らぐ目を見開いたまま絶命した。

男を撃った相手は、彼の開いたままの瞼を優しい手つきで閉じてやり、今は亡き男の使っていたコンソールから小さなメモリーを抜くと、入って来た時と同じように部屋から出て行った。

廊下を降りながら先程の男と初めて会った時の事を思い出す。

彼は得体の知れない自分に向かって嬉々として夢を語った。

少し聞けば誰もが馬鹿らしいと一笑に附す夢だったが、彼の眼はとても真剣だったのを今でも忘れていない。

しかし、彼には悪いが、そんな夢なんて実現する訳がない。

彼がどんなに心から世界の平和を願った所で、結局は悪が強いのが世の道理だ。

現実がそれを証明している。

先程の出来ごとを思い出しながらそう考える。

トレンチコートの余ったベルトを揺らして、階段を降りていく影は消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945s/>

世界がオワルちょっとマエ

2011年10月9日00時07分発行